【調査報告】

# ハンセン病療養所のキリスト教会について ①
## 外島家族教会からの一考察

阿部伊作

## はじめに

2022 年 5 月現在、日本国内には、13 の国立ハンセン病療養所が存在し、入所者 926 名、平均年齢は 87.6 歳である。[1] 1996 年ハンセン病予防法廃止から四半世紀が経つが未だ、回復者とその家族の被害の回復は終わっておらず、その偏見と差別、隔離の歴史は入所者高齢化のなか、その記憶の保存と継承に社会的な関心を寄せられ、アーカイブズの役割が問われている。療養所の歴史においてキリスト教信徒が多いことは一つの特徴と言われる。2005 年次、信徒は療養所入所者全体の 31%（カトリック：9.4%、聖公会：10.7%、プロテスタント：11.2%）であった。[2] 各療養所の宗教地区にあるキリスト教会は、カトリック、聖公会、日本基督教団に属する教会、そして単立教会など、約 29 教会があり、現在も継続されているが、外部からの支援を受けながらの礼拝、また閉じる教会も出てきている。教会アーカイブズとして重要な事柄と受け止める。

ハンセン病療養所は、孤島や人里はなれて遠方に設置されたというイ

1　広報誌『ある群像』No. 122、好善社、2022 年 12 月、7 頁

2　「ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任 ― 宗教界」（『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』同検証会議編集、2005 年、414 頁）https://www.jlf.or.jp/assets/work/pdf/houkoku/saisyu/13.pdf　2022 年 12 月 5 日最終閲覧；拙稿「好善社資料を中心とした国立ハンセン病療養所内キリスト教会と長島聖書学舎についての一考察 ― 教会員数推移表」（『キリストと世界』32 号、2022 年、120 頁）

メージがあるが、当初、都市部近郊に療養所があったことを知る者は少ない。1909 年当初に設立されたハンセン病療養所は、浮浪患者の救護収容のため、隔離性の低い場所へ立地する傾向が強く、1930 年代以降に設置された療養所は、逃走患者防止のため、山林や島嶼など隔離性の高い場所への立地がみられた。[3] 伝染力感染は微弱であると医学的にはすでに解明されていたが、誤った理解や日本古来の差別感と隔離政策の造られたハンセン病観が、療養所設置における市民の立地反対運動など複雑な背景に影響を与えた。

本稿では、1909（明治 42）年に大阪に開設されたハンセン病療養所外島保養院（現：邑久光明園）と同院内にあった外島家族教会（現：光明園家族教会）を対象として、その歴史的意味と記憶の継承について考察する。外島保養院は、1934（昭和 9）年、室戸台風の関西上陸で壊滅するまでの 25 年間、大阪府西成郡川北村（現在の西淀川区中島）に存在した。同保養院に関する資料は、室戸台風で流失し失われたが、入所者による記念誌[4]や研究者による研究[5]、外島保養院の歴史を残す会の活動記録などを通して当時を想起する。[6]

1997（平成 9）年、外島保養院があった場所に、邑久光明園自治会は「らい予防法」記念事業として外島保養院記念碑を建立した。2014 年には、外島保養院の歴史を残す会が設立され、毎年、室戸台風来襲の 9 月に関係者が集い、慰霊行事を催し記憶の継承が行われている。[7] 現在、跡地近くには

3　古山周太郎「ハンセン病療養所の立地に関する研究」（『都市計画論文集』39.3、2004 年 913-918 頁）

4　邑久光明園入所者自治会『風と海のなか ― 邑久光明園入所者八十年の歩み』日本文教出版、1989 年

5　松岡弘之「史料紹介 ― 日本基督教団大阪基督教会所蔵外島保養院家族教会関係資料」（『大阪の歴史』2016 年 107–118 頁）

6　本稿においては、引用する史資料や歴史的記述にあたって必要な場合に限って「らい、ライ、癩」などの表記を用いるが、それ以外については、基本的には「ハンセン病」と表記する。また病者については文脈に応じて「入所者」「患者」「回復者」という呼称を用いる。

外島保養院跡記念碑

防波堤と物流倉庫と公園だけがあり、外島保養院を示すものは碑以外にはない。

国内のハンセン病対策は、宗教者らによる慈善活動が先行して行われ、国からの衛生医療・福祉対策はなく、1907（明治 40）年に制定された法律 11 号「ライ予防ニ関スル件」により、1909 年、ハンセン病者のための連合府県立療養所が、5 区域に設置された。療養所の名称は、全生病院・北部保養院・外島保養院・第四区療養所・九州癩療養所である。[8] 当時、数万人のハンセン病患者がいることが分かりながら、虎列刺（コレラ）病予防心得（1877 年）、伝染病予防規則（1880 年）などの政府衛生対策（1875 年内務省衛生局設置）に比べ大きく後れをとった政策であった。[9]

法律 11 号法は、「療養ノ途ヲ有セス且救護者ナキモノ」、経済的に極めて困窮したハンセン病者のみを「療養所ニ入ラシメ之ヲ救護」すること、[10]当時相当数いた無資力患者、浮浪患者（本籍不明また無籍者）に対する援護法として出発し、大多数の有資産患者はこの法律の適応対象外であった。困窮患者保護のための側面が強い法律であった。背景に放浪らい者を国恥とする考え方、先進国を目指す欧化主義的国策が影響を与えたと言われる。同法は 1925 年改正され、浮浪らい患者に限っていた療養所への隔離対象が変更され、事実上、すべての患者を隔離できるようになり、患者隔離が

7　外島保養院の歴史をのこす会『大阪にあったハンセン病療養所 ― 外島保養院』大阪市保健所感染症対策課、2017 年、70–73 頁

8　国立ハンセン病資料館（『隔離の百年 ― 公立療養所の誕生』同資料館、2009 年）

9　山本俊一「法制度への道程」（『日本らい史』東京大学出版会、1993 年、39–63 頁）

10　廣川和花「ハンセン病者の社会学」（『人口と健康の世界史』ミネルヴァ書房、2020 年　219–241 頁）

推し進められた。病気の治療や予防よりも、患者を隔離することが目的となっていった。そして1931年法律58号「らい予防法」においては、入所者の退所、自宅療養も想定したうえですべての患者の入所が進められた。

外島保養院は、1909年に第三区療養所として、神崎川（地域によっては相川）が大阪湾に注ぐ河口、大阪湾の一番奥まった海抜0メートルの低湿地帯の中州に開院した。[11] 対象地区は二府十県（大阪、京都、兵庫、奈良、三重、岐阜、滋賀、福井、石川、富山、鳥取、和歌山）で、当初、大阪府下高槻付近に敷地を求めたが、住民の反対にあっている。[12] 1925年大阪市に編入され、翌年（設立15年後）、定員拡大予定と隔離強化にともない拡張・移転計画が持ち上がったが、またもや地域市民の反対運動により都市部での計画とん挫、1934（昭和9）年9月の室戸台風来襲により施設は全壊した。入所者173名を含む196名が犠牲となり、入所者は6つの療養所に分散委託された。現地での再建はならず、[13] 保養院は岡山県長島で「光明園」として改名復興され、現在に至っている。

外島保養院内に創立された教会は、家族教会と命名され、最初の洗礼式は1912（大正元）年、A・D・ヘール（カンバーランド長老教会宣教師）より12名が洗礼を受けた。教会役員らは、その後、外島保養院自治に関わり、各療養所入所者による自治会の先駆けとなっていき、保養院また、各療養所において特筆される出来事であったと言える。

5つの連合府県立療養所はいずれも開設草創期からキリスト教の活動が行われた。北部保養院（現松丘保養園）は、聖公会宣教師伝道師が1912（明治45）年に訪問、説教を行っている。[14] 全生病院（現多摩全生園）では、開院に関わった好善社慰廃園関係者またオルトマン宣教師による院内最

11　『大阪にあったハンセン病療養所』11頁

12　山本俊一『日本らい史』東京大学出版会、1993年、142頁

13　松岡弘之「外島保養院の移転と患者自治」（『近代大阪の地域と社会変動』部落問題研究所、2009年309–343頁）

14　松丘聖ミカエル教会『全国ハンセン病療養所内・キリスト教会沿革史』日本ハンセン病者福音宣教協会、1999年、17–42頁

初のクリスマス祝会が 1909（明治 42 年）に行われ、同年 9 名が洗礼を受けた。[15] 1914（大正 3）年クリスマスに 11 名の洗礼式が執り行われた。大島療養所（第四区療養所：現大島清松園）では、霊交会と命名されたキリスト者の会が、大島開設の 5 年目 1914 年に創立され、九州療養所（現菊池恵楓園）では、リデル宣教師など聖公会が 1909 年 10 月より活動を始め、1913 年洗礼式を執り行い、黎明会と命名された教会が発足した。[16]

本稿は、ハンセン病療養所また療養所内教会が、日本キリスト教史のなかで確かに位置づけされる必要を視野に、療養所外部のキリスト教会との関係に注目し、多角的に回復者キリスト者の実相と、当時のキリスト教会の姿を掘り下げ記述することを試みるものである。

構成は、先行研究を整理し、外島保養院と外島家族教会（聖書塾含む）の設立の概要と実際、阿部礼治、福田荒太郎、ヘールなど関連人物、日本基督教会、大阪同志神学館など関連する団体について記し、保存と継承の観点から課題と展望、まとめとしてなぜ残すべきかその意味を述べる。研究の方法は、文献調査を主に、主要資料として基督教年鑑、日本基督教会年鑑に注目した。今まで、キリスト教統計資料からの検証はほとんどなされていないと思われる。

## 先行研究及び資料について

この章では、外島保養院と家族教会に関する先行研究及び資料について主要と思われるものを取り上げ、内容や論点、視点を整理する。関連する分野としてはキリスト教的社会福祉、入所者自治会活動、都市地域史、差別、地方行政の福祉事業、人権、外島保養院の特徴と特異性などである。外島保養院に焦点を当てた研究は乏しく、蓄積も少ない。基本資料として「外島保養院年表」[17] と療養所記念誌[18]、また「外島保養院小史」[19]、機関誌「楓」

15 「らい患者との出会い」（『ある群像 ― 好善社 100 年の歩み』日本基督教団出版局、1978 年、100 頁）

16 『れいめい ― 暁を待つ人々』菊池黎明教会、1992 年、年表 285-312 頁

（邑久光明園慰安会発行）[20]がある。概説的なものに「外島保養院から邑久光明園へ ― 一〇〇年の歴史をたどる」（『ハンセン病市民学会年報』[21]）、家族教会については　岩本清濤（定吉）『故ヘール先生の片影』、『教会小史』、また邑久光明園家族教会の年史が存在し[22]、地域行政からは『大阪府ハンセン病実態調査報告書（付資料編）』[23]がある。入所者の手記等は、記憶のずれなどがあり、より客観的な記録からの検証が必要な場合がある。

まず、外島保養院は、各療養所のなかで早い段階で自治会活動が実践され、先駆けとなったことが特記される。藤野豊（ハンセン病療養所について

17　『外島保養院年報（復刻版）― 近現代日本ハンセン病問題資料集成補巻 1・2』不二出版、2004 年。第三区府県立外島保養院発行の年次報告書「統計年表」である。1909-1936 年（欠 1926-1933 年）までが確認されて復刻されている。何点かは国立国会図書館でデジタル公開が進んでいる。書名は大正 14 年より「年表」から「年報」に変更された。患者について病的調査（発病、死亡、経過年齢、項目、背景と生活記録［宗教、職業、教育程度、出入り調査（逃亡など）］、文書電話取次件数、の出入り療養所内の状況）

18　『国立療養所邑久光明園創立 60 周年記念史』国立療養所邑久光明園、1969 年；邑久光明園入園者自治会著『風と海のなか ― 邑久光明園入園者八十年の歩み』同自治会 1989 年；国立療養所邑久光明園入所者自治会編『隔離から解放へ―邑久光明園創立百周年記念誌―邑久光明園入所者百年の歩み』山陽新聞社、2009 年

19　阿部礼治「外島保養院小史」1-8 回（『楓』7 巻 1-8 号、1952-53 年）

20　和志美最堂「一河の流れ」（『楓』1961 年 2 月 -1962 年 1 月号）

21　望月拓郎ほか「外島保養院から邑久光明園へ ― 一〇〇年の歴史をたどる」（『ハンセン病市民学会年報』ハンセン病市民学会編、2010 年、170–203 頁）

22　阿部礼治「家族教会史」（『おとうさん ― 阿部礼治長老追悼記念文集』1967 年、33-44 頁）；『神の家族―光明園家族教会八十五年記念誌』日本基督教団光明園家族教会、1998 年 5 月発行、514 頁（教会 15 年間の年譜［1998-2011 あり］；『続神の家族 ― 光明園家族教会の 100 年』日本基督教団光明園家族教会、2013 年 12 月、140 頁（教会 15 年間の年譜［1998-2011］あり）；岩本定吉「故ヘール博士と家族教会 ― 大阪府外島保養院にて」（「福音新報」1462 号、1923［大正 12］年 7 月 5 日、12 頁）

23　『大阪府ハンセン病実態調査報告書』同報告書作成委員会、2004 年

国の隔離政策を解明してきた[24]）は、保養院初期の入所者自治会活動について、「入所者管理は、初代今田院長の強硬策のなか出来た入所者の「自治会」で、入所者自身に隔離された生活を受容させるためのもの」と隔離政策に利用、取り込まれた入所者管理で、与えられた自治管理の一手段にすぎないと捉えたが、「外島保養院における入所者運動は他の療養所に継続され、入所者運動の歴史において、その名は永遠に記憶されよう」とも評価した。他方、松岡弘之は入所者の自治の活動について、「相互相愛」の精神での自治の実践、患者の共同体の特性をふまえた賃金体系「互助金制度」を他療養所に先駆け導入したことなど、同保養院の自治会活動と作業改革について検証を行い[25]、藤野の自治会理解は、「自治が導入される契機としては誤りでないが、そもそも自治とは管理者による統制か、入所者による自律かという二者選択ではなく、両者を含む多様な主体が療養所という場における共同生活をいかに維持・発展させたかが統一的に捉えられなければならない[26]」と反論した。そして患者自治活動全体を与らえれた秩序ではなく、「療養所を生きるに相応しい場所へと作り変えようとした入所者の挑戦が管理の側へと浸潤していく過程」と位置付けた。この包括的また入所者の実際に沿った研究で、松岡は 2020 年ハンセン病市民学会第 4 回神美知宏・谺雄二記念人権賞研究部門を受賞し、外島保養院研究への新たな方向性を示した。

入所者の自治会活動の概要や歴史については、『全患協運動史[27]』があり、その第一章前史「自治の揺籃」、第二章組織と人権を守るたたかい「出発のとき」に外島保養院の入所者活動が記されている。同書は、全 8 章で自治会活動初期から戦後 1976 年までの活動が網羅されている。また、患者

24 『日本ファシズムと医療 ― ハンセン病をめぐる実証的研究』岩波書店、1993 年などがある

25 松岡弘之『ハンセン病療養所と自治の歴史』みすず書房、2020 年

26 同上、30 頁

27 全国ハンセン氏病患者協議会『全患協運動史 ― ハンセン氏病患者のたたかいの記録』一光社、1977 年（年表あり）

自治会については、猪飼隆明が九州療養所自治について[28]、阿部安成らが大島清松園について[29]の研究を行った。

都市としての大阪でのハンセン病対策については、廣川和花が「戦前・戦時期大阪におけるハンセン病患者の処遇 ― 大阪皮膚病研究所と大阪のハンセン病問題」(『大阪の歴史』72 号、2009 年）や『近代日本のハンセン病問題と地域社会』(2011 年）で当時の大阪におけるハンセン病治療の現状や実態を地域性や歴史に即して詳細に記した。また、「ハンセン病者の社会史」[30]で明治期の身分制度解体とハンセン病者について、大阪という都市での困窮者処遇について触れ、近世日本社会史からの視点を提供した。

ハンセン病療養所の神学校である長島聖書学舎及び、家族教会出身の伝道者については拙稿で記した[31]。外島家族教会に係る主要なキリスト者については、元邑久光明園職員であった森幹郎[32]による人物史と参考文献がある[33]。直接接した人々について元職員ならではの記録である。日本基督教会牧師渡辺信夫は、入所者阿部礼治について信仰的側面を記した[34]。また療養所とキリスト教会の関わりについては松岡がその研究で、自治会の発端に、家族教会の牧師福田荒太郎の存在を指摘した[35]。その入所者の生活への着目は、ハンセン病問題研究の枠組みをより俯瞰的に検討するための示唆を提

28　猪飼隆明「自治会の結成」(『近代日本におけるハンセン病政策の成立と病者たち』日本ハンセン病学会雑誌 86［2］、2017 年、104–105 頁）

29　阿部安成ほか「香川県大島の療養所に展開した自治の痕跡」(『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』10、2013 年、49–68 頁 )

30　廣川和花『人口と健康の世界史』ミネルヴァ書房、2020 年、219–241 頁

31　拙稿「好善社資料を中心とした国立ハンセン病療養所内キリスト教会と長島聖書学舎についての一考察（『キリストと世界』32 号、2022 年、105–149 頁）

32　杉山博昭『キリスト教ハンセン病救済運動の軌跡』大学教育出版、2009 年、9 頁

33　森幹郎「外島家族教会をめぐる人々」(『足跡は消えても ― ハンセン病史上のキリスト者たち』ヨルダン社、1996 年、124–141 頁）

34　渡辺信夫「この世に生きたキリスト者 ― 邑久光明園で学んだこと」(『ライ園留学記 ― 愛と希望の記録』教文館、1968 年、151–174 頁）

35　松岡（2020)、前掲書、43–48 頁

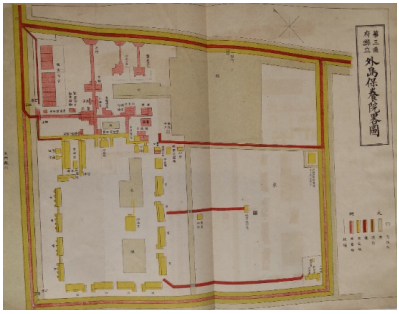
示している。

外島保養院に関わったA・D・ヘールについては、ヘール宣教師兄弟を送り出した米国カンバーランド長老教会によって創設されたウキルミナ女学校（現：大阪女学院）による「大阪女学院学園史研究」[36]と『A・D・ヘール先生と外島家族教会』[37]などがある。人物史については、貢献、また顕彰の文脈での記述でさらなる研究が待たれる。関西におけるハンセン病者へのキリスト者慈善活動の歴史については、戦国時代に宣教師によってなされたハンセン病者への病院活動として、海老澤有道の研究[38]がある。

## 外島保養院と外島家族教会

### 外島保養院、その生活と背景

**外島保養院**（現国立療養所邑久光明園）の概略は前述したが、当初の定員は300床（名）[39]。職業別分類によると当初収容された人々の上位は、「四国遍路」「浮浪」「無職」が上位を占めている[40]。入所者岩本定吉は「言うまでもなく、救いを必要としなかったほど、四囲の状況が甚だ暗たんとしたものであった。病者の多くは四国西国を巡拝した。あらゆる辛酸の極みをつ




「外島保養院略図（『大正五年統計表』外島保養院、1917年）」。地図、見張り台、防波堤、有毒、無毒地の記載がある。

36 「自筆による A.D. ヘール来日までの経歴」（『大阪女学院史研究』1号、2012年、133-135頁）

37 『A・D・ヘール先生と外島家族教会』大阪女学院創立125周年記念行事委員会編、2008年

38 海老澤有道「救癩事業近畿各地」（『切支丹の社会活動及南蛮医学』冨山房、1944年、178–186頁）

39 『大阪にあったハンセン病療養所』70頁

40 松岡（2020）、「表1-3 入所者の職業」、41頁

くしても。そこに救いがなかったそれ等の人は人も捨て、仏も神も捨てたもの、とおもって自分自身をすてた。天刑の患みを受けた運命の呪いは実に悲惨に深いものであった。この魂の傷は絶望そのものであった。……苦悩してきた経験は遺憾の状態を通り、絶望の底に固着して、仏の慈悲、神の愛を疑っていた。故に宗教には冷淡で嘲笑的であった。無明の世界」と内実を記している。[41]

また、外島保養院は、元埋立地で、当初、水道の便がなく、井戸水は塩分を含むものだった。京阪神の都市部に近いため、設立当初は、当時いわゆる「放浪らい」と呼ばれたハンセン病患者を多く収容し風紀が悪く、賭博が横行していた。一部の者が権力をもち、園内作業を独占して請け負い、労賃の大半をピンハネすることが常習であった。そのため逃亡する者もいた。しかしそれらを苦痛とも恥とも思わない自暴自棄的状態であった。

院内部全景の写真。外島保養院統計表より

大阪府では、内務部衛生課が担当していたが、1893（明治 26）年に衛生事務が内務部から警察部に移され、1942 年まで、衛生事務は警察部が担当した。[42] 監視する見張り台があり、刑務所のようであり人権は無視されていた。職員は収容定員に比べ著しく少なく、軽傷者が作業を強いられた。逃亡者も多くいた。連合府県立療養所は警察部の管轄下にあり、初代の所長今田虎次郎は、曽根崎署長であった。1915 年、定員 100 名増、1928 年 100 名増、大正大礼、昭和大礼のため増加がなされた。また大阪都市計画のなかでの療養所の存在について議論がなされていった。[43]

41　岩本清濤（定吉）『故ヘール先生の片影』福田荒太郎、1926 年、34 頁

42　『大阪府ハンセン病実態調査報告書』、27 頁

43　岡崎早太郎「大阪都市計画と癩療養所問題（『大大阪』大阪都市協会、7 巻 7 号、46–50 頁）;「官報」1926 年（土地收用公告 外島保養院拡張、大阪府）https://

自治による院内秩序確立の模索がなされ、1918（大正 7）年より自治制度が公認された。原因は入所者の経済的格差、院内の暴力や賭博などによる秩序の混迷と逃亡者の多発である。療養所では画期的なことであった。[44]「相愛互助」の理念のもと入所者の経済格差の緩和、1921 年に院内の改善を訴えた青年団初代理事岩本定吉、二代目桂文吉はともに家族教会信徒であった。

1934（昭和 9 年）9 月 21 日、近畿地方を直撃した室戸台風により、外島保養院は壊滅し、多くの命が失われた。大阪市においては、死者 990 名、市内で最も犠牲者の多かったのは此花区 256 名、その次に西淀川区 243 名、そのうちの約 8 割近くを占めたのが 187 名を外島保養院関係者（患者 173、職員 3 、職員家族 11 名、入院患者登録数 597 名中、死亡者 173 名：行方不明含む）であった。[45] 被災後、入所者は全国の療養所に分散委託され、様々な要因で現地での復興再建は叶わずに、1938（昭和 13）年 4 月、ハンセン病療養所長島愛生園のある岡山県邑久郡長島に移転して名称を光明園と変えて再興され、現在の国立療養所邑久光明園に至っている。[46,47] 松岡は、『島は生きる』収録の対談において、室戸台風の被災による患者分散を通して、療養所の自治が広がり、外島保養院、光明園は療養所入所者による自治の実践の起点となったと述べており、[48] 例えば阿部礼治と長島の石本俊一とのやり取りである。外島の自治会を参考にしたいと「自治会会則」が昭和 5（1930）年に送付されていた。[49]

---

dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2956163　2022 年 12 月 5 日最終閲覧

44　松岡（2020）、前掲書、「自治の誕生」「自治の模索」

45　『風水害記念誌』第三區府縣立外島保養院、1935 年、https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1456231

46　松岡弘之「外島保養院の移転と患者自治」（『近代大阪の地域と社会変動』部落問題研究所、2009 年、309-320 頁）

47　『大阪にあったハンセン病療養所』72 頁

48　分科会「救らい思想とは何だったのか」（『島は生きる（ハンセン病市民学会年報 2017）』解放出版社、2019 年、162-163 頁）

49　石本俊一「阿部礼治さんと私」（『おとうさん ― 阿部礼治追悼記念文集』1967

## 外島保養院での自治とキリスト教との接点

阿部礼治によると、今田院長より自治の許可がおりたのは 1915 年 4 月、統計年表（注 17 参照）によると 1918 年のことであった。外島保養院で、1921 年に院内の改革を訴えた青年団が誕生した。初代理事は、岩本定吉である。

外島保養院では、1928（昭和 3）年、後述する四貫島セツルメントが職員官舎と患者地域の境界線で掛出しの日用品の売店を開いた。[50] 翌 1929（昭和 4）年自治会が事業としてその売店を回収し、収益は自治会の共有金として蓄積となった。[51] 売店は九州療養所でも、自治会にとって重要な存在となっていく。

## 外島家族教会

外島家族教会草創期の記録、『故ヘール先生の片影』『教会小史』、邑久光明園家族教会年史など[52]によると、保養院が開設されて 3 年後の 1912（明治 45）年頃、福田荒太郎（大坂伝道同志神学館卒）が伝道活動を行い、外島キリスト教青年会が誕生した。基督教年鑑によると外島家族教会は 1912 年に設立された。[53] 設立日は、岩本定吉によると 1912 年 11 月 17 日の A・D・ヘール来院日、阿部礼治によると 同年 1 月 16 日、『日本基督教会年鑑』は 11 月 16 日としている。

---

年、49 頁）

50 『風と海のなか ― 邑久光明園入園者八十年の歩み』1989 年、33 頁、巻末年表、407 頁

51 松岡（2020）、前掲書、66 頁

52 阿部礼治「家族教会史」（『おとうさん ― 阿部礼治長老追悼記念文集』33-44 頁）;『神の家族 ― 光明園家族教会八十五年記念誌』日本基督教団光明園家族教会、1998 年、514 頁（教会 15 年間の年譜有［1998-2011 頁］）;『続神の家族 ― 光明園家族教会の 100 年』日本基督教団光明園家族教会、2013 年、140 頁；岩本定吉「故ヘール博士と家族教会 ― 大阪府外島保養院にて」（「福音新報」1462 号、1923 年 7 月 5 日、12 頁）

53 日本基督教会総務局編『日本基督教会年鑑』日本基督教会総務局

この福田の働きは、ヘールの励まし、支援により支えられた。礼拝は、外島保養院の共同礼拝堂（真宗、真言宗、禅宗、浄土宗、日蓮宗、天理教、基督教）を使用した。阿部礼治は発足式を、「日本基督教会本部より議長代行として浪花中会議長森田金之助、A・D・ヘール（カンバーランド長老教会宣教師、大阪神学校教授）、桑田繁太郎（日本基督教会牧師、大阪北教会牧師、大阪神学院教頭、日本基督教会大会副議長などを務めた）、飯島誠太、百島操（大阪東教会牧師、東京神学社入学、トルストイ本翻訳者）らの教師、保養院から今田虎次郎院長、北島砂彦書記長、その他の来賓、教会員が参加。会長：福田荒太郎、副会長：藤本藤松、会計：黒岡幾太郎、執事：岩本定吉、書記：岡本清太郎、幹事：本井参三、中谷大吉、道下路夫、日本基督教浪花中会所属、自給の外島家族教会として開設した」と記した。浪花中会議事録によると 1915 年 4 月の第 38 回浪花中会にて、中会直轄の団体として公認する事が決議されたと記されている。1912（大正元）年 12 月、12 名がヘール師より洗礼を受けた。回覧誌『恩寵』も発行され、家族教会は、その後、日本基督教浪花中会に属する自給の協力ミッションの伝道地として教会形成がなされていった。

協力ミッションとは、日本基督教会内部にあって、あるいは関係して実施する伝道活動は管轄する権利有ることを承認され、「大会」が伝道局を経由して承認する方法で実施される教会として定義され、申し合わせをした教会である。

『全国ハンセン病療養所内・キリスト教会沿革史』の光明園家族教会（245–266 頁）によると、草創期の信徒数推移は、大正 5 年：67 名、 6 年：57、7 年：54、8 年：63、9 年：44 名で、保養院定員 400 床（大正 4 年）の 1 割近い教会員がいた。[54]

## 家族教会でのクリスマス会

大正期外島保養院年表によると、慰籍欄 12 月にクリスマスをする等、

54 「光明園家族教会」（『ハンセン病療養所内キリスト教会沿革史』246 頁）

「患者一同ノ安心ヲ計リタルニ其ノ効果著大ナルガ如シ」とある（1916［大正5］年版、33頁）。大阪教会に残る史料「クリスマス献金のお礼」（阿部礼治[55]）によると「常に多大な厚情に預り」と大阪教会[56]へのお礼があり、1922（大正11）年のクリスマスへの寄付、寄贈のお願いにつづく「クリスマス献金趣意書」では、今までの祝会の内容として活動写真の上映、諸教会からの贈り物があったことなどが記されている。

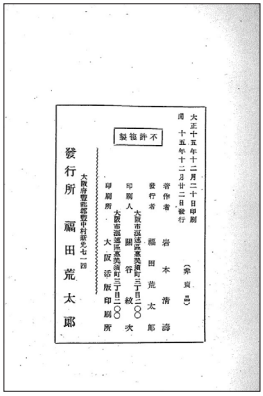
写真は、清教学園所蔵の外島保養院10周年（1919年）の記念写真である。左奥の建物は礼拝堂、後列左端にヘールらしき白髭の人物が映っている。他の白衣は職員である。職員数名も教会に関わっていた。前列、右から4人目は阿部礼治と思われる。

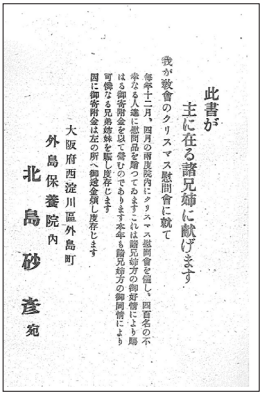
松沢記念資料館所蔵『故ヘール先生の片影』（1926［昭和元］年）の冊子に挟み込まれていた赤色の案内紙「此書が主に在る諸兄姉に献げます」には、クリスマス慰問会の事柄が記され、参加者は400*- 名、献金献品の送り先は外島保養院北島砂彦（院書記長）へとあり、家族教会のクリスマス慰問会が、保養院全体の行事となっていることが分かる。文は以下である。

> わが教会のクリスマス慰問会に就て　毎年十二月、四月の丙院内にクリスマス慰問会を催し、四百名の不幸なる人達に慰問品を送っていますこれは諸兄姉方の御好情により賜はる御寄附金を以て営むものでありますす本年も諸兄姉方の御同情により可憐なる兄弟姉妹を賑し度存じます

55　松岡、「史料紹介」（『大阪の歴史』84、118頁）

56　大阪教会：1874（明治7）年、梅本公会として設立。翌年、仮牧師としてゴードン（M. L. Gordon 1843-1900）を招へい、77年に大阪基督教会に改称。82年に宮川経輝牧師が就任。一致教会から日本組合基督教会になった。宮川経輝（1857-1936）は、熊本バンド出身で同志社神学校を卒業、組合教会の三元老の一人といわれた。日本組合基督教会は、86年4月の西京第二基督公会（同志社教会）において第九回日本基督伝道会社年会が開かれ発足した（『キリスト教歴史大事典』1052頁）




因みに御寄附金は左の所へご送金煩し度存じます

## 聖書塾

1913（大正 2）年、福田は、同教会内に聖書塾を開設し、岩本定吉、藤本藤松、高橋、竹内の 4 名が入学し、3 年後、岩本、藤本の 2 名が卒業、伝道師資格を与えられ、らい病者伝道者養成の先駆けとなった[57]（その後、草津の聖書学舎、長島の長島聖書学舎などがある）。

卒業式は、浪花中会より教師 1 名、ヘール師、今田院長、北島書記長、福田荒太郎、他の来賓を迎え、伝道師の准允書を授かり正式な伝道師になった[58]。日本基督教会では教師試補、教会憲法規則（大正 9 年改正）第七条、教師試補の試験及び准允において、その資格を得ることとなっている。この伝道師とは教師試補のことであり、准允書を受けたと思われる。（現）日本キリスト教会憲法（1953 年制定、2007 年改正）では、7 条教師試補は、規則に従い、教師候補者として伝道に従事することを認可された者である。教師試補の籍は中会に属する。教師試補は、中会の指導と訓練のもとに置かれる。教会および伝道所において伝道に従事する教師試補を伝道師というと明記されている。

57 「浪花中会記録」1916（大正 5）年 4 月 11 日、39 回中会　議事、諸報告
58 「光明園家族教会」（『全国ハンセン病療養所内・キリスト教会沿革史』246 頁）

大正 13 年の日本基督教年鑑の浪花中会伝道所外島の教職者(牧師又は主任者) 欄に中会未加入者岩本定吉の記載がある。福田が保養院を離れた後、岩本が伝道師として家族教会を支えた。

前出の大阪教会所蔵「クリスマス献金の趣意書」に、岩本定吉が、1916—21（大正 5—10）年に、和歌山の湯の峰温泉で伝道活動を行ったことが記されている。[59] 現在の和歌山県田辺市本宮町（旧国紀伊国牟婁郡）である。

また、外島保養院で福田より入信した武市久治は 1913（大正 2 ）年、草津に保養に行き伝道して、神山卯三郎を導き、ヘールの支援を得て、「大阪家族教会草津支部」の看板を掲げた。福田も 1914（大正 3）年、草津を訪ね応援したが、[60] 翌年にはその活動は終息した。草津では既に聖公会が伝道を開始していたため二つの教派があると紛争になると考え、双方で相談し、家族教会は、その地での伝道活動から積極的撤退を決めたためである。会員数は「ヒール博士の後援により宇瀧下大川氏の二階を借り「大阪家族教会草津支部」を設け伝道に従事した。最盛期は 20 名の同志を獲得した」と記されている。[61] 藤本藤松は光明園記念誌に、礎石となった信徒の一人と記された。[62]

入所者による療養所外の伝道としては、他に岸名信若、青木恵哉、阿部千太郎、小倉兼治などがいる。

福田は、1923（大正 12) 年日本基督教会牧師を離職、その後は、個人（浪花中会未加入教職者）として家族教会に関わった。1926 年、桑田繁太郎牧師（1874-1952）により福田の後任として石黒寅亀神学生（大阪神学院卒）が派遣、4 年半、奉仕した。ヘールが逝き福田が去った後、桑田、馬淵、

59　松岡、「史料紹介」(『大阪の歴史』84、109 頁)

60　『湯之澤聖バルナバ教会史』日本聖公会・聖慰主教会、1982 年、60–63 頁;「湯ノ澤 60 年史稿」32 頁、574 頁

61　『御座の湯口碑』御座の湯口碑刊行協力委員会、1972 年 44 頁;湯之澤部落 60 年史稿の「3 湯之澤癩部落と宗教運動」

62　『風と海のなか — 邑久光明園入所者八十年の歩み』342 頁

堀井順次、後藤、石黒と六代の牧師が関わり 23 年、宣教師は、フルトン（Fulton, G.W.）、オルトマンス（Oltmans, A. 1854-1939、アメリカ・オランダ改革教会［RCA］宣教師、東山学院初代院長）、クラーク（E. M. Clark）、マーチンなどからの援助があった。[63]

1934（昭和 9）年、前述した室戸台風来襲の風水害遭難で、家族教会信徒は、27 名またその後の委託中に 5 名が犠牲者として召天した。入所者はその後分散委託させられ、大島療養所より委託者引き取りのため職員と患者が到着、大島療養所自治会代表石本俊一（大島霊公会信徒）は、弱い療友（重症入所者）を引き取ると励ました。[64] 広報誌「日本 MTL」44 号（1934［昭和 9］年 10 月）は、台風被害後の慰問特集号で、外島保養院救援義金募集、三上千代による「外島保養院救護記」2-3 頁が記され、45 号 1934（昭和 9 年 11 月）は外島復興号（全 12 頁）46 号は「水害に対する御礼」阿部礼治であった。

外島家族教会は、その後、移転した光明園療養所内で、光明園家族教会として「家族」の名を継承したが（日本基督教年鑑会統計年表からは記載がなくなる）、単立教会としてあゆみ、「外島時代、日本基督教会浪速中会に所属していた家族教会は、いつごろか、浪花中会、日本基督教会からは記録が消え、1949（昭和 24）年教団に加盟するまで事実上単立の教会であった」と同教会牧師津島久雄は 85 年史序文に記した。

1949 年（昭和 24 年）になって、日本基督教団東中国地区（岡山・鳥取）に加盟所属した。[65] 日本基督教団へはその後、療養所内の谷川教会（奄美和光園）と神山教会（駿河）が加入した。家族教会が先駆けとなった。1958 年、播磨を伝道師と招聘、専任教職者と迎えた。療養所内教会としては異例のことである。通常、療養所教会では一牧師謝儀を支えられないが、他教会が援助した。就任した歴代牧師は大嶋常治、河野進、播磨醇、津島久

63　阿部礼治「外島家族教会小史」（『日本 MTL』48 号、1935 年 2 月、6 面）

64　石本俊一「阿部礼治さんと私」（『おとうさん ― 阿部礼治長老追悼記念文集』1967 年、49–50 頁）

65　『基督教年鑑 1950』キリスト新聞社、1949 年

雄（1923–2011）で他代務者がおり[66]、現在は岡山博愛会教会渡辺真一師が代務者で関わっている。

2022 年現在、教会は設立 110 年。終末期を迎え会員は 7 名（内園外者 2 名）であるが、現在も家族教会は邑久光明園家族教会として継続されコロナ禍のなかでも月 2 回の礼拝が継承されている。

家族教会草創期の大きな特徴として、一牧師福田荒太郎の献身的な働きと、福田が教会役員と共に院内自治会活動に積極的な関わりをもっていたことが評価される。

外島統計から、外島家族教会に関わる部分は以下である。

第三区府立外島保養院発行『統計年表』『年報』
現在患者宗教別表（人数）と説教回数表より

| 年度 | 教会説教回数 | 教会信徒数 | 真宗 | 浄土宗 | 真言宗 | 禅宗 | 日蓮宗 | 天理教 | 他(宗教不明含) | 宗教合計 | 定員 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1912（大 1） | 15 | 14 | 122 | 27 | 42 | 26 | 23 | 39 | 8 | 304 | 300 |
| 1913 | 42 | 36 | 123 | 22 | 45 | 21 | 28 | 33 | 4 | 312 | 300 |
| 1914 | 30 | 57 | 117 | 22 | 42 | 18 | 19 | 28 | 4 | 307 | 300 |
| 1915 | 39 | 72 | 138 | 19 | 38 | 21 | 29 | 28 | 9 | 354 | 400 |
| 1916 | 22 | 67 | 143 | 24 | 62 | 29 | 30 | 26 | 8 | 389 | 400 |
| 1917 | 23 | 57 | 138 | 29 | 82 | 37 | 26 | 25 | 10 | 404 | 400 |
| 1918 | 27 | 54 | 124 | 27 | 74 | 31 | 27 | 24 | 11 | 372 | 400 |
| 1919 | 32 | 63 | 135 | 22 | 69 | 32 | 27 | 20 | 7 | 375 | 370 |
| 1920 | 30 | 56 | 133 | 23 | 59 | 38 | 27 | 18 | 5 | 359 | — |
| 1921 | 27 | 43 | 151 | 27 | 71 | 22 | 17 | 18 | 4 | 353 | — |
| 1922 | 26 | 36 | 152 | 26 | 74 | 30 | 29 | 16 | 6 | 369 | — |
| 1923 | 21 | 35 | 163 | 24 | 76 | 23 | 28 | 12 | 4 | 366 | — |
| 1924 | 14 | 33 | 163 | 29 | 77 | 36 | 28 | 11 | 8 | 385 | — |
| 1934（昭 9） | — | 44 | 175 | 17 | 93 | 2 | 39 | 30 | 6 | 408 | — |

66 「歴代牧師一覧」（『続神の教会 — 光明園家族教会の 100 年』16 頁）

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1935 | — | 42 | 165 | 17 | 76 | 2 | 26 | 28 | 4 | 360 | — |
| 1936 | — | 42 | 151 | 15 | 74 | 2 | 35 | 25 | 3 | 347 | — |
| 1937 | — | 38 | 133 | 14 | 73 | 4 | 34 | 23 | 3 | 322 | — |

＊合計は当該年度の逃亡者も含む数値

## 浪花中会

明治期、関西では、長老主義の日本基督一致教会（1877［明治 10］年設立）と会衆主義の日本基督伝道会社（1878 年設立、のちに日本組合基督教会:1886 年設立）の 2 つの大きな組織が存在した。1889 年、米国カンバーランド教会ミッションは、日本基督一致教会の協力ミッションに加入し、浪花中会所属となった。翌年、同一致教会は日本基督教会と改称した。日本基督教会は長老主義派で、一箇教会主義ではなく数個以上の教会が責任をもって関わる教会政治形態をもち、小会・中会・大会の組織をもった。それぞれの各個教会長老会議が小会、5 つの教会以上で「中会」を作り、複数の教会から代議員が派遣されて開催される長老会議を中会、さらに広範囲になる長老会議を大会とした。

1891（明治 24）年浪花中会に登録された教会は 17、カンバーランド長老教会は、大阪カンバーランド第一長老教会（現大阪西教会）、同第二長老教会（現大阪東教会）、新宮、愛隣（海南）、和歌山、田辺、須賀、愛知、四日市のカンバーランド所属 8 教会である。浪花中会は、1906 年に長野、富田林、大阪住吉の 3 講議所、1912 年に外島家族教会の設立許可を行った。それらは、1909 年のプロテスタント基督教日本開放 50 周年と相まって当時大阪において熱心に行われた伝道活動の一端を表していると言える。当初、日本基督教会浪花中会は「浪花中会」と表記されていたが、「浪華」「難波」などとも書かれ、混乱を避けるため 1930（昭和 5）年に中会で「浪速中会」と表記が決められた。[67]

日本基督教会は、1903 年、東京、浪花、山陽、鎮西、宮城（後の東北）、北海道の六中会、その後、臺灣中会（1906）、満洲中会（1912）、朝鮮中会

67　第三章「長谷川計太郎牧師と続く試練の時代」（『日本基督教会大坂西教会百

（1915）が設立され、東京、浪花、京城、鎮西、山陽、北海道、臺灣、朝鮮、満洲中会の 9 つへ広がる。[68]

## 療養所内教会を巡る人びとと団体

### 福田荒太郎

福田荒太郎の略歴と療養所との関わりは、森幹郎『足跡は消えても』、『おとうさん ― 阿部礼治の家族教会小史』また松岡弘之による記述がある。それらによると、1889（明治 22）年 1 月岡山生まれ、1898（明治 31）年、植村正久から幼児洗礼を受け、受洗は 1903 年 2 月であった。台湾に渡り、山岳民族伝道（生蕃）を志したが、ハワイのハンセン病救済者ダミアン神父の伝記を読み、ハンセン病患者への伝道を決意、帰国して、1912（明治 45）年に大坂同志神学館（大坂同志神学館は、伝道同志神学館のち大阪神学院と改称、後に中央神学校と合併された）。を卒業した。[69] 同校誌「北畠学報」8 号には図書費購入寄贈者名に、森田金之助教頭ウヰルミナ女学校校長記念謝恩記念贈呈報告にも卒業生として献金者の名前がある。

高井ヘラー由紀の台湾キリスト教史[70]によると、台湾において日本基督教会南庄伝道所（1897-1912）で福田荒吉は、伝道師として 1908 年 2 月から 6 月まで、遠藤千浪と共に活動していた記載がある。森幹朗の記述と照合して福田荒吉は福田荒太郎である可能性が高いと推測できる。『福音新報』によると、福田は 1908（明治 41）年より山岳民族伝道を開始したが、その後日本人伝道に従事した。1911 年 6 月、病のため内地帰還したことが

年史』1989 年、100 頁）

68 『大正 5 年年鑑』1916 年、23 頁

69 『福音新報』937 号、1913（大 2）年 6 月、13–14 面、教勢・6 月 9 日大坂伝道同士神学館卒業式

70 高井ヘラー由紀「日本統制下台湾における日本人プロテスタント教会史研究（1895-1945 年）」国際基督教大学大学院比較文化研究科提出博士論文、2003 年 22–25 頁

記されている。[71]

福田は、前述した通り、1912年外島保養院にて伝道活動を始め、外島家族教会が形成されていった。周りの教職者が反対するなか、献身的な働きがなされたと推測されている。[72] 日本基督教会では、伝道者を教師試補として、一定の資格あるものが中会の試験に合格し、伝道の准允を受けた場合にこの名称とすることとなっていた。[73] 福田も神学校卒業後、伝道者試験に合格し教師補となり、[74] 翌年野田講義所主任となる。1915年4月河南伝道教会（南河内郡富田林町）就任。1916（大5）年2月、野田より富田林講義所へ転任（38回中会記録）。1917年、富田林教会を辞任した。[75]

『大正14年基督教年鑑』[76] また1915（昭和2）年『基督教年鑑』フース・フー（教役者略伝）には、日本基督教会教職者として「原籍岡山、明治22年1月生、受洗：明治36年、前任：大阪野田教会、現在：大阪府西成郡河北村外島保養院家族教会、妻及び男児1名女子1名。教派：日本基督教会、現住所：豊能郡中村新免714」の記載がある。

大阪教会所蔵「クリスマス献金の趣意書」（「大正11年のクリスマスに際してらい病者等にご同情を寄せられん事を」1922年12月15日付）では、福田とヘールの連名で家族教会の将来構想が描かれ、「教会堂の建設」「福音宣伝の拡張」（患者伝道師の養成含む）、「癩病部落の経営」「癩児院（名称「樹林之園」）の経営」[77]「機関誌「ひびき」の発行」の5プロジェクトが活版

---

71 『福音新報』845号、1911年9月7日、教勢・台湾南庄伝道教会

72 秋山英明「光明園家族教会創立100周年を祝して」（『続神の家族 ― 光明園家族教会100年』63頁）

73 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980年、233頁

74 『浪花中会記録』1912年4月19日、中会議事19、1913年

75 『日本基督教団富田林教会50年史 ― 1954-2004』富田林教会、2005年、29–30頁

76 『大正14年基督教年鑑』1924年12月発行、224頁

77 「癩児収容所設立趣意に就て」（『私立療養所［近現代日本ハンセン病問題師資料集成補巻6巻］』2005年、131–135頁）；「ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（1）療養所3、公立療養所時代」345頁

4 頁で紹介されている。[78, 79] これらを通し福田の牧師の技量を上回る実践的な社会貢献の視点、労働都市大阪の当時の労働運動の影響が窺われる。

福田は、妻からハンセン病者への伝道を反対され、それがもとで 1916（大正 5）年離婚にいたった。日本基督教会では離婚した牧師は戒規を受け、免職となる。1917 年、日本基督教会は福田の富田林教会の辞任について話し合いをもち辞任を受理した。[80] 福田は、その後、自活の模索をしながら外島での活動をつづけた。阿部礼治『家族教会小史』によると、宇野利右衛門[81]の会社で教育係長として働き、また、鶏やうずらを飼って、外島へ通った。信徒の困窮に同情し、療養所外からカフスボタン磨きや待ち針作りの内職を融通し、療養所での生活の経済的貢献をもたらした。しかし、それらは長く続かず、サラリーマンに転身した。時にはクリスマスやイースターに入所者も驚くような物を贈り続けた。1924 年には舶来性三球ラジオを寄贈し信徒を驚かせた。家族教会信徒にとっては、福田が去っても、恩師と呼び、その存在は、長く影響力をもつものであった。1930（昭和 5）年『日本基督教会年鑑』260 頁には、中会未加入教職者として、任所：外島、能勢郡豊中村新免での記載がある。1933 年には、山岡光盛（服部時計大阪支店長）との連名で、実用新案（4 件）を登録している。福田は、翌 1934 年 3 月、肩書「日本周波電気時計株式会社技師福田荒太郎」[82] として台湾で講演した。日本周波電気時計株式会社とは、電気時計を専門に設立された日本電気株式会社の子会社でその技師であった。[83]

---

78　松岡「史料紹介」（『大阪の歴史』84 号、112–116 頁）

79　松岡（2020）前掲書、46 頁

80　『浪花中会記録』40 回議事録、1917 年

81　宇野利右衛門（1875-1934）は当時、職工問題に取り組んでおり、福田はその下で『疲労制限論（シリーズ職工問題資料 A390）』工業教育界大阪局、1918（大正 7）年を『工場衛生』記者として執筆した。同書結語として「人はパンなくして生くる能はず、パンを浄化せるものが精力にして……活動と休息　休暇と睡眠が必要である」と結ばれている。

82　金丸裕一「『台湾電気協会会報』記事総目録 1932-1943」（『立命館経済学』54 巻 2 号、2005 年、131 頁）

日本周波電気時計株式会社が取得した2件の特許には、電気時計発明者として福田の記載があり（108743号、110046号）、また、帝国時計学校講師として帝国時計技術講習会（場所：東京市京橋区岡坂町二丁目37）で講演を行った。参考として当時の官報に載った時計技術者に関わる広告を以下に引用する。

> 大見出し：益々有望なる時計修理術
> 文章：自宅で立身成功が出来る　如何なる素人でも最も短期間に自宅で修理技術の独習ができる修業の上は無資本同様で直ぐに独立開業多大の収入を確実に得て将来益発展すべき方法あり、希望者は至急ハガキで申し込め見本付会則進呈す。[84]

福田は、東京で日本周波電気時計株式会社代表として成功を収めた。[85] 多くの特許、実用新案を得た。[86] 大阪技術会講師、帝国正時協会理事なども歴任した。

1951（昭和26）年、福田は、家族教会を30余年ぶりに訪問した。感動の再会、対面をはたした。晩年は熱海教会役員につき（昭和25、27年）、

---

83　ピエール＝イブ・ドンゼ「戦前期日本時計産業におけるイノベーション ― 服部時計店の特許戦略を中心に」（『経済論叢』185（3）、京都大学、2011年、123–124頁）

84　「官報」1922（大正11）年4月25日、大蔵省印刷局 info:ndljp/pid/2955033

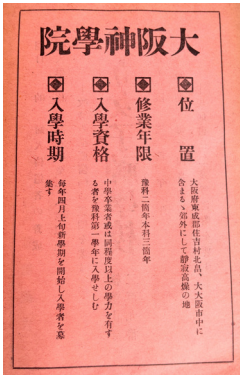
85　『全国工場通覧』昭和13年版・749頁によると、「計算器、金銭登録器、タイプライターなど事務用機器製造業欄、東京市　日本周波電気時計　目黒区三田188、創業昭和8年、タイムレコーダー、代表：福田荒太郎、三、機械器具工業」であった。「産経会社年鑑」第6版（産業経済新聞社年鑑局，1966年）、「全国工場通覧」昭和13年版（日刊工業新聞社，1938年）、「日本会社録」第6版（交詢社出版局，1968年）等

86　「発明＝The invention.」発明推進協会，1934年、31（12）201頁、34（12）、35（1）；福田荒太郎「日本周波電気時計に就いて」（『Watt』6（8）、ワット社、1933年、24頁）；「工場に於ける電気利用特殊時計の応用に就いて」（『紡織界』20（3）、9頁）

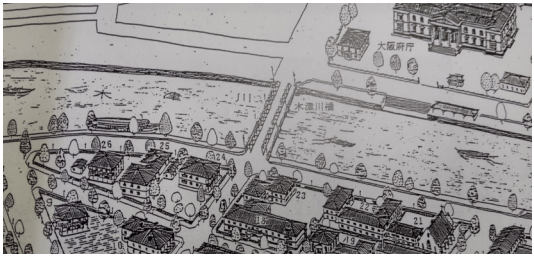
1956（昭和 31）年 10 月 3 日召天。享年 67 歳であった。喘息の持病があった。葬儀は熱海教会で堀田富三牧師司会のもと執り行われ、会社関係者多数参列した。[87] 1975 年、福田の息女大泉かおるが、家族教会礼拝に参加し、福田の思い出などを語り合った。[88]

## 大坂同志神学館

同館は、福田荒太郎が卒業した神学校である。米長老教会（米長老ミッション :PM）宣教師 D・マーレー（Murray, David Anbrose 1861-1949）[89] が山口で私塾として始め（学生：西山道五郎、加藤正人、伊原、黒瀬才二ほか）、後に 1903（明治 36）年、大阪東区空堀にて自宅を提供して起居を共にする伝道




大正 15 年
『日本基督教会年鑑』
広告より




1890 年代の川口居留地 22 番（『ウヰルミナ物語』より）

1890年代のウヰルナ女学院校舎(『ウヰルミナ物語』より)

87 『熱海教会 60 年の歩み』日本キリスト教団熱海教会、1978 年、52 頁、91 頁。召天者名簿に記載有。

88 『家族教会年史』

89 『開教五十年記念講演集』日本図書センター；「明治学院の外国人宣教師―瀬川和雄遺稿集」（『明治学院歴史資料館資料集』13 集、2018 年、57 頁）

同志館として設立した。その後、ウヰルミナ女学校（1904年浪華女学校と合併、現大阪女学院）が移転した後の校舎（西区川口二十二番［元川口居留地］、隣接する裏地19番地Bにはヘール宅が、対岸に大阪府庁があった）に移転した。[90] 1909年、金沢で宣教また金沢女学校（現・北陸学院）で教えていたジョージ・W・フルトン（G. W. Fulton, 1865-1947、米国長老教会宣教師、下関梅光女学院初代理事長）[91] が後を継ぎ、院長となり、1918（大正7）年に豊中市岡町に移転、マーレー館と改称。1920（大正9）年大阪住吉区住吉町北畠（現阿倍野区）へ移転し大阪神学院と称し、1927（昭和2）年に神戸神学校（創立1907年、米南長老教会宣教師S・P・フルトン校長）と合同して中央神学校となる。合併で伝道同志館以来の歴史は25年で幕を閉じた。[92]

『基督教年鑑』大正14年版では、「住所は大阪市外住吉村北畠、教師、新約の部に森田金之助、実践神学：馬場鉄作」。『日本基督教会年鑑』大正15年版の日本基督教会関係諸事業の学校：専門学校・神学校の部に、「大阪神学院：住吉区住吉町北畠730、創立明治39年、創立以来の卒業生82名、大正15年4月末現在生徒は19名」と記述されている。

**大阪神学院**の教師陣は、教師陣はA・D・ヘール（カンバーランド宣教師、組織神学、牧師養成指導など）、桑田繁太郎（1901年明治学院神学部卒、大阪北教会牧師、教頭担当）、森田金之助（1900年明治学院神学部卒、オーバン神学校留学、[93] 11年に帰国し教授就任、教頭担当、25年辞任、のち大阪女学院校長就任。教会は天満伝道教会）、山本秀煌（東京一致神学校で学ぶ、オーバン神学校留学、大阪東教会牧師、1909年明治学院神学部へ就職）、村田四郎（11

90　中山昇『A.D. ヘールに学ぶ』カナン文庫、2001年、171頁

91　「明治学院の外国人宣教師―瀬川和雄遺稿集」41頁；『梅光学院下関100年史』2017年、418頁。日本基督教会50年記念集会で「伝道機関としての日本基督教会」と題して講演を行った。

92　『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、219頁

93　岡部一興「オーバン神学校に学んだ人々」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』47、2015年、407–448頁）

年明治学院神学部卒、15 年オーバン神学校卒、16 年大阪同士神学館教授就任、17 年より大阪南教会牧師兼務のち明治学院第五代院長)、馬場銑作（築地大学校を経て、一致神学校［明治学院神学部の前身］1888 年卒、オーバン神学校留学、大阪西教会牧師[94]）、川添万寿得（1896 年明治学院神学部卒、オーバン神学校留学、1909 年講師嘱託、翌年辞任、のち聖書改訳委員、日本神学校校長）等で、草創期は、昼間に聖書を学び、夜間は大阪市内の講義所で伝道に従事するという実践的な学校であった[95]。明治学院出身教師が多く、明治学院大阪分校的であった 。明治学院神学部は、「気風は自由、クリスチャン・スクールで、どこかロマンティックな、どこか清教徒的な、カルビニズムと異教主義との混ざりあったような場所[96]」「学術的雰囲気よりも、献身的伝道的気運があふれていた[97]」の学風で、明治期の神学校は「アカデミックな神学研究よりも伝道に必要な実践的伝道者の育成が緊急、不可欠であった[98]」といわれる。校長、教授の顔ぶれ、立地などにより、米長老教会の経済的支援の元での経営であったことが推測[99]、示唆される（ちなみに明治学院神学部の経営主体は海外ミッションであった[100]）。

同館は、入学資格は中学卒業程度の学力、修学年限は最初 3 年、のちに 4 年、大正 13 年より予科 2 年本科 3 年の 5 年制となった。石坂幸之助に

---

94 「馬場銑作牧師小伝」（『日本基督教会大阪西教会百年史』同編纂委員会、1984 年、68–72 頁）

95 長谷川計太郎「大阪神学院の思い出―その前身の同志館と共に」（『中央神学校の回想―日本プロテスタント史の一資料として』同神学校同窓会、聖燈社、1971 年、78-84 頁）

96 村田四郎「回顧五十年」（『原始キリスト教研究』創文社、1962 年、349 頁）；渡辺善太「明治学院神学校」（『渡辺善太全集 5 巻』1966 年、64-105 頁）

97 「神学部と伝道活動」（『明治学院百年史』明治学院、1977 年、140 頁）

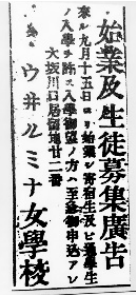
98 磯岡哲也「明治前半期におけるプロテスタント神学校」（『国學院大學日本文化研究所紀要』80、1997 年、189-216 頁）

99 「われらの神学校物語」『エス・ピ・フルトンの生涯と神学思想』中央神学校同窓会、1976 年、53-73 頁

100 「神学部と日本基督教会の伝道」（『明治学院百年史』明治学院、1977 年、215 頁）

よると、「川口旧居留地、クラスは3つ、学生数は20名ほどの小規模、2階学生寄宿舎、1階チャペルと5つほどの教室のモルタル塗りの二階建ての建物[101]」であった。

卒業生には、長谷川計太郎（1917［大正6］年卒業、オーバン神学校留学、後大阪神学院講師、大阪西教会牧師[102]）、森田殿丸（南教会牧師）、西端利一（姫路教会、大阪住吉教会牧師）、冨山光慶（1911年入学、山田教会牧師）、鈴木伝助（堺教会ほか、のち日本東亜神学校校長[103]）などがいた（小野村林蔵は1906年入学し、後に東京神学社へ転学[104]）。山本秀煌は『日本基督教会史』のなかで「第一回（明治41年）11名、第二回7名、第三回4名、第四回2名の卒業生を出せり、大正年間に至りて大いに発展したり」と記している[105]。


始業及生徒募集廣告
本ル九月十五日ヨリ始業ヲ第一学生及ビ選科生ノ入學ヲ許ス入學願望ノ方ハ至急御申込アレ
大阪川口居留地廿二番
ウ井ルミナ女學校

大阪女学院記念誌より

同校発行誌「北畠學報」5号（大13.7、7号までは出版者：森田金之助、8号より長谷川計太郎）には、大正13年度の蔵書は3千数百部（同校学報　7号）、テニスコートあり。西端利一は「中会、大会から、あるいは日本基督教会の先輩から他の認可神学校の如く顧みられず、ややもすれば継子扱いを受けてきた母校 …… 一方卒業生の多くは伝道不振の難教会に任を受け、あるいは極めて小さき教会に、あるいは田舎に働く者がおおい一、二の先輩を除けば、伝道会に何の権威も認められてない[106]」と記し、長谷川計太郎は「卒業後、浪花中会で準試験を受け及第、地方の小教会（講義所）その後伝道教会を形成し、さらに数十年

101　石坂考之助「同志館時代の思い出」（『中央神学校の回想』152–155頁）

102　「長谷川計太郎牧師小伝」（『日本基督教会大阪西教会百年史』同編纂委員会、1984年、94-99頁）

103　鈴木伝助「回想の一つ二つ」（『中央神学校の回想』148–150頁）

104　小野村林蔵「豊平物語」（『小野村林蔵全集3巻』新教出版社、1979年、513頁）

105　山本秀煌『日本基督教会史』復刻版、改革社、1973年、384頁

106　西端利一「森田先生を送る」（『北畠学報8号』大阪神学院、1925年、3面）

経て、ようやく〇〇教会牧師の資格が与えられる。明治学院神学部や東京神学社の卒業生が享受したキャリアとは同等ではなかった[107]」と記した。神学院は、大会認定の神学校ではなく、森田は格付けするため体制を整え労したが、認定はとれず合併となったと推測される。当時、関西では、日本基督教会の認定神学校として神戸神学校（1907［明治 40］年設立、後の中央神学校［27 年］設立）、日本組合基督教会の神学校は同志社英学校、日本メソジストでは関西学院神学部（1889［明治 23］年設立）、聖公会では大阪三一神学校（1882［明治 15］-1915 年［大正 4］が存在した。また自由メソジストでは大阪伝道学館（1905 年設立）において実践的な人材養成を行い、1922 年に自由メソジスト神学校に改称した。[108]

## オーバン神学校

大阪同志神学館教授たちが留学したオーバン神学校は、米国ニューヨークにあった。[109]同神学校は、長老派と会衆派の結合のなかで生まれた超教派的立場の学校で、日本からの留学生の多くは旧日本基督教会の教職、明治学院神学部卒業者で、ユニオン神学校に合併するまで 73 名の日本人が留学した。最初の留学生は　田村直臣で 1882 年に留学、いわゆる「花嫁事件」後であった。川添万寿得（佐久教会辞任後留学）は、帰国後、数年し日本神学校校長を務めた。

宣教師フルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbek）が、1869 年に、宣教師ヘンリー・ルーミス（Henry Loomis、横浜第一長老公会［横浜指路教会の初代仮牧師］）、ノックス（George Willam Knox、東京一致神学校教授）、が 1877 年に夫々、卒業している。[110]

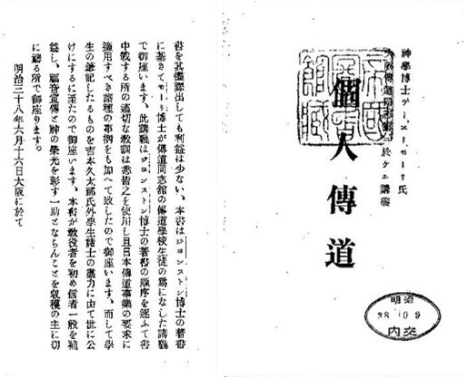
---

107　長谷川計太郎「大阪神学院の思い出」（『中央神学校の回想―日本プロテスタント史の一資料として』聖燈社、1971 年、80 頁）

108　中村敏『日本プロテスタント神学校史―同志社から現在まで』いのちのことば社、2013 年

109　岡部「オーバン神学校に学んだ人々」407-448 頁

110　『長老・改革教会来日宣教師事典』新教出版社、2003 年、152 頁


神學博士デー・エー・モーリー氏
於ケル講義
個人傳道
明治
88 10 9
内務

デー・エー・モーリ著『個人伝道』
1905 年「伝道同志館に於ける講義」
（国立国会図書館所蔵デジタルコレクション公開）

大坂伝道同志館 教員及生徒

右の図は、校長であったモリーの著作である。

右下の写真は、大阪女学院学院史資料室所蔵の大坂伝道同志館教員及生徒の写真である。上段左上に、A・D・ヘール、また中段左から2人目はG・W・フルトン、他に川添万寿得、桑田繁太郎、森田金之助、長谷川計太郎、冨山光慶、阪野嘉一、福田荒太郎らの姿が確認できる。場所は、川口二十二番、年代は1913（大正2）年前後と推測できる。根拠は、森田の帰国と就任が1911年から、長谷川計太郎在籍が1913–17年であること、山本秀煌（1909年明治学院へ就職）、村田四郎（1916年教授就任、1918年辞任）が映っていないことなどによる。

以上、家族教会に関わる人物、団体を探ってきたが、家族教会信徒数等は、『基督教年鑑』と『日本基督教会年鑑』から記すと以下（次頁）の通りである。

## 『基督教年鑑』（復刻版）による記録

『基督教年鑑』日本基督教会同盟発行（発行は、原則、タイトル年の翌年）、日本基督教会同盟年鑑委員［編纂］、日本図書センター、1994.6 復刻版ほか

| | 教会名称と住所 | 信徒・洗礼・礼拝・祈祷会出席 | 主任教役者 |
|---|---|---|---|
| 大正 5(1916) 年版 | 記載なし | 記載なし | 記載なし |
| 大正 7 年版 | 日本基督教会・外島伝道所（西成郡川北村） | 集金欄 50、信徒数：144 名 | 記載なし |
| 大正 8 年版 | 日本基督教会・浪花中会未加入伝道所之部外島伝道所（同上） | 信徒数記載なし | 記載なし |
| 大正 10 年版 | 日本基督教会・外島伝道所（同上） | 信徒数記載なし | 岩本定吉 |
| 大正 11 年版 | 日本基督教会・外島伝道教会（同上） | 52 名 | 岩本定吉、教役者住所：川北村外島保養院 |
| 大正 14 年版 | 日本基督教会・外島伝道 | 以降、人数記載欄が年鑑の教会及び主任教役者章の項目からなくなる | 岩本定吉（フースフー欄には福田荒太郎記載有、現住所：能勢郡中村新免） |
| 大正 15 年版から昭和 2（1927）年版 | 日本基督教会・外島伝道（西成郡河北村） | 人数記載なし | 福田荒太郎（フースフー欄には福田名記載有、現住所：能勢郡中村新免） |
| 昭和 3 年版 | 日本基督教会・外島伝道（西成郡河北村） | 人数記載なし | 福田荒太郎（フースフー欄には福田名記載有、現住所：外島保養院） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 昭和 4 年版 | 日本基督教会・外島伝道（西淀川区外島保養院） | 人数記載なし | 福田荒太郎、フースフー欄に福田名前有、出身：外島保養院家族教会、現住所：外島保養院 |
| 昭和 5 年版 – 昭和 8 年版 | 日本基督教会・外島伝道（西淀川区外島保養院） | 人数記載なし | 福田荒太郎。フースフー欄に福田の記載無 |
| 昭和 9 年版 | 日本基督教会・家族伝道所（西淀川区外島保養院内） | 人数記載なし | 石黒寅亀（兼牧）、フースフー欄、現任地：大阪市外河北教会、牧師試補 |
| 昭和 10 年版 | 日本基督・外島家族伝道所（西淀川区外島保養院内） | 人数記載なし | 石黒寅亀（兼牧）、フースフー欄、現任地：大阪市外河北教会、牧師 |
| 昭和 11 年版 – 昭和 15 年版 | 日本基督・外島家族伝道所 | 43 名 | 記載なし |
| 昭和 16 年版 | 記載なし | 人数記載なし | 記載なし |

＊『基督教年鑑』日本基督教会同盟編集は、大正 5 年から始まる。

## 『日本基督教会年鑑』（日本基督教会事務所）統計による外島家族教会　教会員数の記録

家族教会創立は、大正元年十一月十六日、所属は浪花中会伝道所、統計数値は年鑑タイトルの前年度

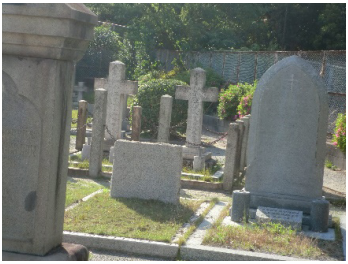
| | 名称、所属 | 会員・受洗者・礼拝出席・祈祷会出席者数 | 牧師または主任者 |
|---|---|---|---|
| 大正 5(1916) 年 | 浪花中会伝道所之部、外島（協力北長老）大阪府西成郡河北村 | 男 79、女 11、計 90 名、受洗者 28 名、礼拝 52 名、祈祷会 40 名教会学校 19 名、同教師 2 名 | 記載なし |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 大正 13 年 | 浪花中会所属伝道所之部欄、外島、設立：大正元年 11 月 17 日 | 男 39、女 13, 計 52 名、洗礼 1 名、夕礼拝 30 名、祈祷会 30 名（連絡なしのため前々年の統計） | 岩本定吉（中会未加入教職者） |
| 大正 15 年 | 浪花中会所属伝道所、外島：大阪市新淀川区川北村創立：大正元年 11 月 17 日 | 42 名 | 福田荒太郎<br>豊能郡豊中村新免 |
| 昭和 2（1927）年<br>大正 14、昭和元年度統計 | 外島：西淀川区外島保養院 | 56 名 | 福田荒太郎<br>豊能郡豊中村新免<br>中会未加入教職者 |
| 昭和 3 年 | 上同 | 58 名 | 福田荒太郎<br>豊能郡豊中村新免<br>中会未加入教職者 |
| 昭和 4 年 | 上同 | 67 名・受洗者 16 名・礼拝 42 名・祈祷会 42 名 | 福田荒太郎<br>豊能郡豊中村新<br>中会未加入教職者 |
| 昭和 5 年 | 外島：浪花中会所属伝道所之部に自給と括弧書き付きで名前がある | 男 72、女 16、計 88 名、現住陪餐 88 名、大人受洗 10、増 21、日曜礼拝朝 50、夕 45、祈祷会 50 名 | 福田荒太郎<br>豊能郡豊中町新免<br>中会未加入者 |
| 昭和 6 年 | 外島：大阪市淀川区外島町保養院内、自給伝道所 | 男 73、女 19、計 92 名、現住陪餐 92 名、礼拝朝 51、夕 45、祈祷会 52 名 | 福田荒太郎<br>此花区市岡町<br>中会未加入教職者 |
| 昭和 7 年 | 家族：大阪市淀川区外島町保養院内、自給伝道所。（＊浪速中会所属各教会出張伝道地に、大島あり香川県木田郡大島［明治 42 年］担当教会高松東伝道教会　担当者　エリクソン） | 男 59、女 18、計 77 名、受洗 6 名、日曜礼拝：朝 40, 夕 35 名、祈祷会 42 名 | 石黒寅亀△印（教師試補）兼務 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 昭和 8 年 | 浪速中会所属伝道所之部に「家族」と表示あり、大阪市西淀川区外島保養院内 | 男 59、女 19、計 78 名、現住陪餐 78 名、受洗 4 名、日曜礼拝：朝 38、夕 32 名、祈祷会 40 名 | 石黒寅亀△印（教師試補）兼務　書記　安部孔治 |
| 昭和 9 年<br>地図有 | 浪速中会伝道所、「外島家族」開始大正元年 6 月、建設大正元年 11 月 16 日、西淀川区外島保養院 | 男 56、女 14、計 70 名、現住陪餐 70 名、受洗 4 名、日曜礼拝：朝 38、夕 32 名、祈祷会 40 名 | 石黒寅亀△印（教師試補）兼務、西川友二郎、岩井俊夫、阿部禮助、 |
| 昭和 10 年 | 浪速中会所属伝道所、「外島家族」（自給）開始大正元年 6 月、建設大正元年 11 月 16 日、通信ハ中会宛） | ＊自宅 PC チェック、記載なし | 記載なし |
| 昭和 11 年<br>地図有 | 浪速中会所属伝道所「外島家族」（自給）通信ハ中会宛）他は記載なし | 同書別表差込　男 38、女 5、合計 43 名 | 記載なし |
| 昭和 12 年 | 浪速中会所属伝道所「外島家族」（自給）通信ハ中会宛）他は記載なし | 男 38、女 5、計 43 名 | 記載なし |
| 昭和 13 年 | 浪速中会所属伝道所「外島家族」（自給）通信ハ中会宛）他は記載なし<br>伝道開始大正元年、教会建設大正元年 11 月 16 日 | 男 38、女 5、計 43 名 | 記載なし |
| 昭和 14 年 | 浪速中会所属伝道所「外島家族（自給）」通信ハ中会宛他は記載なし | 男 38、女 5、計 43 名＊浪速中会所属各教会出張伝道地の中に大島霊交会（明治 42 年）あり | 記載なし |

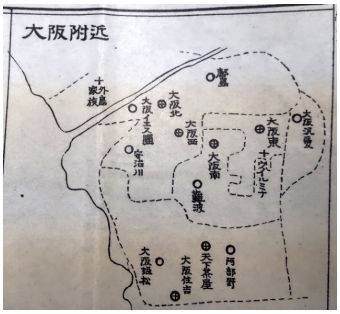
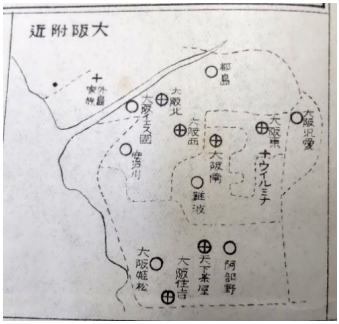
| | | | |
|---|---|---|---|
| 昭和15年 | 表記なし（出張伝道地に大島霊交会あり） | 男38、女5、合計43名（連絡なしのため前々年の統計） | 記載なし |
| 昭和17年日本基督教団第一部年鑑（旧日本基督教会）昭和18年1月発行 | 記載なし | 記載なし | 記載なし |

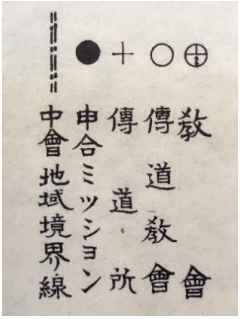
## A・D・ヘール宣教師


ヘール先生墓地

家族教会にその晩年、関わりをもったA・D・ヘール（Hail, Alexander Durham, 1844-1923）は、米国オベリン神学校を卒業し、医師免許をもつカンバーランド長老キリスト教会派遣宣教師であった。1878年（明治11）年来日、大阪川口居留地（西区に住み満49年間、弟J・B・ヘール（1846-1928）と協力し、特に大阪南、和歌山、三重などの僻地を伝道し、各地で教会を創設した。それらには、大阪西、東、河内長野、富田林、大阪住吉、泉佐野教会がある。また、教育者としては、大阪同志神学館で教員として働き日本人伝道者を育成し、その自主性を尊重した。1984年、居留地に大阪女学院を同長老キリスト教会教育監督として創設した。1911（明治44）年、長男J・B・ヘールが浅間山噴火により不慮の急逝を招いた。川口居留地にある自宅で1923(大正12）年6月5日召天、享年80歳、『福音時報』に福井珍彦、岩本定吉による記事がある[111]。墓地は豊中市服部の外国人墓地である。外島保養院家族教会との関わりは、ヘールが68歳（1912年)、来日34年目の時より12

111　福井珍彦「故ヘール博士」(『福音新報』1461号、1923［大正12］年、4面)；岩本定吉「故ヘール博士と家族教会―大阪府外島保養院にて」(『福音年報」1462

| 1922（大正 11）年 8 月調査 | 1930（昭和 5 年）調査 |
| --- | --- |
| | |
| 1934（昭和 9）年 8 月調査 | 1936（昭和 11）年 8 月調査 |
|  |  |
| 説明 | 地図左上に<br>+ 外島西成郡（1922 年）<br>+ 外島（1930 年）<br>+ 外島家族（1934,1936 年）<br>として外島家族伝道所の存在が示されている |




**日本基督教会大阪地図**（日本基督教会年鑑付録より）

年の間であった。ヘールが最初に保養院に行った1912年のクリスマスに12名の入所者が洗礼を受け、一人ひとりと握手をしたことが入所者にとって大きな励ましとなった。そして召天する前の最後の奉仕先が外島保養院であった。5月17日家族教会での召天者記念会であった。ヘール師から、洗礼を受けた入所者は200名に上る。川口居留地から外島保養院は近い所に存在したこと、また医師免許をもっていたこと、当時、大阪で医療宣教師の活動が活発であったことは、ヘールと家族教会の関係において神の配剤的で背景であった。[112]

ヘールは、福田の働きを支援し、周りの教職者がその働きに積極的な賛同をしないなか、「福田さん、聖示に叶っています」と励まし、共に労し経済的支援を行った。

大阪女学院ヘールチャペル

ヘールについてのまとまった伝記は中山昇による『A.D. ヘール師から学ぶ』がある。YWCAが発行する「女性青年界」10巻（大正2年2月）には大阪ウイルミナ女学校青年会が基督降誕祭を執行するための昨年12月25日「また会員一同祝意を表すため種々なる物品を取り集め西区外島に設立せるらい病院へ寄贈したる」と記載がある。「大阪女学院学院史研究1」には「アレクサンダー・ダーハム・ヘール」と題したアニー・ヘール・ホキェ（長女）による、ライ患者と祝うクリスマスが記載され、家族教会会堂建築のための英国、米国MTL（Mission to Lepers）への資金援助申込にも触れている。ヘール召天後、大阪女学院校長森田金之助が中心となり「ヘール会」が継続的に催されたが、ヘールと大阪女学院に関わる多くの資料は、大阪大空襲で焼失した。残る資料としては現在、清教学園中・高等学校所蔵の中山昇収集資料、大阪女学院学院史資料室の資料など

号、1923［大正12］年）

112　藤本大士「明治初期大阪におけるアメリカ人医療宣教師と医学教育」（『科学史研究』58巻、2020年、318–333頁）

がある。

**阿部礼治**（1883-1965）

外島家族教会で長く長老職を担った阿部礼治は 1883（明治 16）年 9 月、山形生まれ、明治 36 年兵役検査で病宣告。大正 2 年に松丘保養園から転園して、翌 1914（大正 3）年に外島保養院に入所、同年 12 月 20 日 C・A・クラークより洗礼を受けた。その時のことを阿部は「病身の阿部が死に、霊の礼治が生まれた」[113] と表現した。1916 年、教会長老に選ばれ、その後 1927 年外島青年会、1932 年入所者自治会総代、活動、家族教会長老など要職を担う。草創期の家族教会、外島保養院の代表的存在であり「おとうさん」と親しみを持って呼ばれる存在であった。特に室戸台風災害の際の事後活動には、総代事務を任されるに至っている。1965 年（昭和 40）召天。享年 83 歳であった。追悼記念集では多くの人物がその自治会活動、教会長老、人柄と信仰について文章を寄せている。阿部の書簡、日記、覚書ノートは当時の外島を知るための貴重な記録となっている。記録を残し、家族教会小史、外島保養院小史などを記し編んだ。森幹郎によると、阿部は、両手の指はほとんど残らず、残った指の股にペン軸を挟んで字を書いた、と記されている。菌のため容貌が損なわれたが、多くの信頼を得た人物である。自治会役員を、第一代総代：昭和 13 年 7 月就任 、第四代総代:14 年 7 月就任、第九代総代と 16 年 10 か月自治会要職を歴任した。また、療養所内双葉寮（少年少女寮）で寮父を務め、同寮で育てられた立木民夫、津島久雄は、後に長島愛生園曙教会内の長島聖書学舎を卒業し、家族教会の牧師また長老職を担った。渡辺信夫（日本キリスト教会牧師、1923-2020）は、その著書『ライ園留学記』9 章「この世に生きたキリスト者―邑久光明園で学んだこと」で、人の中身「内なる人」を見よと記し、阿部をハンセン病療養所教会のモーセと高く評価した。

113　播磨醇ほか「受洗五十年を迎えて」（『おとうさん―阿部礼治長老追悼記念文集』74 頁）

## 四貫島セツルメント

1923（大正 12）年、大阪市東淀川区に基督教ミード社会館が設置され、隣保事業として藤井藤太が関わった。そして翌々年 1925 年に、大阪市此花区に四貫島セツルメントが設立される。同セツルメントは、法人設立者：賀川豊彦（神戸神学校卒、日本基督教会牧師）と初代館長：吉田源治郎（オーバン神学校卒牧師）によって設立された社会活動団体である。正式名は「日本労働者伝道会社・四貫島セツルメント」である。[114] 同館には天使保育学校・日本基督教会所属大阪イエス団[115]教会（牧師：吉田源治郎）が併設され、社会事業を展開する拠点となった。ここでは、毎日曜日、午前 6 時からの早天礼拝、日曜学校の他、珠算、裁縫教室、英語教育が行われ、キリスト教保育の他、無料歯科診療、訪問看護婦による乳幼児の健康指導と共に貧困家庭への牛乳無料配布など先駆的な事業も行われた。室戸台風で大打撃を受けたが、戦禍で焼失するまで続けられた。[116]

外島保養院との関わりにおいては、イエスの友会[117]奉仕大阪支部有志が、外島保養院内に設置された消費組合売店に設置するため、月刊リーフレット「友愛」を創刊した。「患者、職員の方々及び消費組合関係の人々が主として執筆されているが、我等の同志が尽力されている」と記録が残っている。[118]

後に、関西 MTL 事務所は、日本基督教会大阪イエス団教会で活動を行った。賀川豊彦が刊行した機関誌『火の柱』には、外島保養院で医師また職

114 「四貫島セツルメントの誕生」（『五十年のあゆみ—四貫島セツルメント創設五十年記念』四貫島友隣館、1975 年、2 頁）；『此花区史』1955 年、191 頁

115 1909 年、賀川豊彦が社会福祉事業のためのセツルメント事業として設立した救霊団体。

116 https://tenshi-jesus.com/about/ 2022 年 12 月 5 日最終閲覧

117 イエスの友会は賀川豊彦らが起こした組織で機関誌として『雲の柱』『火の柱』を発行した。

118 「大阪支部より」（『火の柱』復刊、緑蔭書房、1990 年、19 号、8 頁［118 頁］、昭和 3 年 6 月 1 日；26 号、8 頁［170 頁］、昭和 4 年 5 月 15 日）

員として働いた久保田夫婦の記事が以下の通り、掲載されている。外島保養院とイエス団との関わりが分かる記述である。

「4月30日は外島保養院にありてらい患に苦しんでおられる同胞のために両兄姉共日夜献身さる保田春雄兄（事務員）と松田千江子姉（女医）とが結婚、賀川豊彦夫妻が月下氷人となる」[119]、また「生涯をらい病院に：若き女医保田千江子さんに」と題して村嶋歸之が、保田について、経歴と、論文（「鼻汁に於ける癩菌の検出率」第4回癩學会發表抄録、東京醫事新誌、2723号［昭和6年］、「外島保養院在院患者600名に就ての癩菌検査成績抄録」[120]）を記した。

### 関西 MTL（Mission to Lepers）

関連する団体としては、1931（昭和6）年末頃、日本MTL大阪支部が、改名・改組し関西MTLが組織され、1932年1月に発起人数名により、新たな組織として再出発した（1939年より関西救籟協会となる）[121]。

療養所慰問・桜井方策医師のハンセン病啓蒙パンフレット出版、大和川河川敷の浮浪患者慰問、「らい予防デー」講演会などの活動を行った（戦前・戦時期、「無らい県（府）運動」を謳った入所奨励活動は行っていない）。理事は、浅井治子（1892-1940［大阪YWCA第二代総幹事1921-1937］）、古田誠一郎（大阪聖ヨハネ学園長）、浜田光雄、今谷、村嶋歸之（大阪毎日新聞記者）、吉田源次郎（四貫島セツルメント）、山岡光盛（服部時計店大阪支店長）、栄光時計7名、顧問、光田健輔、佐谷有吉、原田、村田ら13名、相談役に岡村平兵衛（堺教会信徒、ハンセン病治療薬大風子油製造）、桜井方策であった[122]。1938年に、関西MTLの庶務が大阪皮膚病研究所に、会計が四貫島セツルメントに移される。キリスト者らによる民間団体関西MTLと大

119　『火の柱』32号、6頁［218頁］昭和5年2月1日

120　抄録、『レプラ』第4巻1号（昭和8年）

121　「日本MTL」17号、1932（昭和7）年2月、6頁

122　廣川和花「戦前・戦時期大阪におけるハンセン病者の処遇―大阪皮膚病研究所と大阪のハンセン病問題」（『大阪の歴史』72、2009年、100頁）

阪皮膚病研究所、府衛生課が連携し大阪のハンセン病問題にあたった。大阪皮膚病研究所は、1903 年に前身の皮膚科が篤志家の寄付により設立され、ハンセン病の外来治療が行われ、後に大阪大学の特殊皮膚病研究所となる。また、慈恵病院は室戸台風以降の関西での患者を引き受けた。

## 課題について

以上、本稿では　1912（明治 45）年から 1934（昭和 9）年、外島保養院にあった外島家族教会について資料を基に考察した。大阪は、水害や戦災で資料紛失が多く、保存されている記録が少ないため、まず、実際的にその記憶の継承に困難さが伴うことがわかった。

同教会は、日本基督教会の宣教師ヘールと牧師福田荒太郎の実践と関わりにより指導され成立した。日本基督教会（浪花中会）では、積極的な支持はえられず、伝道教会として間接的な関わりをもち、大阪の諸教会、大阪教会（組合教会）などもその都度、献品など支援を行った[123]が、あくまで慰安的な支援にとどまった。他方、保養院外の社会から隔離され見離された人々のなかで、療養所外の一般教会でも難しい「相愛互助」の精神を実践すべく改革がなされていた。この逆説的な事実は、さらに本質的な人との関わり、人権や倫理などに関わる事象について入所者の記録からその実践をさらに調べ、正しく評価される課題があると思わされる。

ヘールという外国人の視点とバックボーンをもつ、同労者をもち経済的支援をうけた福田であったが、ヘール召天後、牧師としての職を無くし、他の仕事を模索しながら継続を試みたが、それには限界があった。松岡は、

123　「教勢振興時代明治 44 年―大正 3 年」（『大阪基督教会沿革略史』大阪基督教会、1924 年、134 頁）

124　松岡 (2020)、前掲書、46 頁

125　遠藤興一「大正デモクラシー下の基督教社会事業」（『日本キリスト教社会福祉の歴史』ミネルヴァ書房、2014 年、124-152 頁）

日本基督教会の教職者を離れたその理由について、家族教会が掲げた5つの構想の「危うさ」が露呈した可能性が高いのではないかと推測した。[124] 当時、基督教会内でどれほどのこの活動が理解を得られたか、教会における社会活動の理解、日本基督教会の伝道姿勢のなかでの位置づけが伴ったか、ある種のずれがなかったかが検討されうる。

福田が保養院に関わった大正期は、日本の教会が、次の世代二代目へと世代交替していった時代であった。明治期のキリスト教界では、石井十次、賀川豊彦、留岡幸助、原胤昭、山室軍平などが、児童養護活動や監獄改良、廃娼・矯風運動、貧困救済、医療など様々なキリスト教社会慈善事業を先駆け開拓的に取り組んだ。しかし大正時代には、それら社会事業は社会改革的な性格を弱め、教会との協力へと成長することなく、時には反目する状況が起こり、市民生活に沿う方向でその実践が展開されるようになる。背景として、日本社会の都市化と信仰の個人主義、内面化傾向があった。[125] キリスト教信徒の多くは都市中産階級・知識層であった。日本基督教会でもそうした傾向は顕著で、労働者や職人たちが多く住む下町の庶民や民衆、貧民たちへの伝道は進まなかった。日本基督教会年鑑巻末には、各種社会事業として、出獄者保護（原胤昭）、慰廃園（ハンセン病療養所）、MTL、セツルメント　病院、組合、授産所、保育園、隣保館など種々な事業が掲載されているが、主に個人での働きとして扱われている。大正以降、賀川豊彦を中心とする社会活動が行われたが、それらも日本基督教会会派においては傍流に位置していた。そのなかには築地バント出身の、社会活動を大切にする教職者たちの存在もあった。当時の年鑑には、「社会事業の勃興は、近来都鄙ともに特に注目に値する。……篤志家は、熱心だが、教会としても教職者としても一般の社会事業に対しては、ほとんど没交渉の状態であることは実に遺憾の極みである[126]」と記されている。近代日本の形成において、文化・思想・福祉には多大な影響を与えたキリスト教であったが、大正期、社会福祉事業は、篤志家により支えられ、特にハンセン病に関し

126　牧野虎次「社会教化より観たる我国の現状」（『基督教年鑑』大正10年　1936年、292–293頁）

ては、特殊伝道とし、一部の働き人に限られたものであった。日本基督教会は、伝道、教会形成を優先してきたが、関東大震災後、日本基督教会救護会を設置、社会局は 1930（昭和 5）年にできた。それは他教派より遅れてのことである。先に述べた松岡による福田師離職の理由の考えは、あたかも当時の日本基督教会の体質を見通したかのような的を得た推察であったと思われる。福田が、教会組織が持つ弊害にある種の見切りをつけたとみられても仕方ないような推測が起こる。

改めて、それらの背景で、福田とその働きを支援した人々、外島家族教会と自治活動の広がりを理解し、教会の体質の歴史的背景を知り、教訓を得ることは現在でも重要であると思われる。社会、また教会が、社会の動きに影響され、内向きとなり、信仰の内面化に沈潜、組織保身、弱者に目をむけなくなっていった時代に、ハンセン病療養所内教会では、自治会を担う信徒を多く輩出し、保養院を「相愛互助」をめざし導いた実践の事実は大きい。特に外島家族教会は、定員 300 名のなかでの一割弱の存在でありながら、そのなかから自治会などの働きを担う者がでてき、室戸台風による被災時には患者の割り振り作業など中心的な仕事を担うことになった事柄は評価すべきと考える。ハンセン病療養所へのキリスト教派の関わりはカトリック、聖公会、ホーリネス、そして日本基督教会の関りが存在する。療養所草創期に、積極的な自治活動を展開した療養所が　外島保養院（現光明園）また大島清松園と、それぞれ日本基督教会の教会（家族教会、霊公会）を母体としていたことは特筆される。本稿では、取り扱わないが、大島療養所の三宅官之治（1877-1943 年召天、入所者自治会［後に協和会と改称］、入所者総代 21 期延 10 年半勤め、晩年は顧問となる）、石本俊市、曽我野一美、その他多くのキリスト者が各療養所の自治会活動に関わった伝統がある。それらの活動が、後に続く自治会の社会的活動のなかでどのように継承され、あるいは変化していったかは改めて検討されることである。

## むすびにかえて

キリスト教会の社会的事業への歴史的問題性について日本キリスト教史研究者で牧師でもある戒能信生は、当時のキリスト教社会事業について、明治期の日本基督教会中心的指導者であった植村正久の以下の発言を取り上げ説明した。「ゆえにたとい米国に何らの慈善事業ありとも、また英国にいかなる結社ありと聞くとも、わが国のキリスト教徒は濫(みだ)りに動くことなかれ。今日において吾人に不急なる事業を企て、妄りに微弱なる信徒の負担を重からしむるなかれ。……妄りに慈善事業に狂奔するなかれ。某の育児院、某の企業、果たして今日の急務なるか。これ我らの疑惑するところなり[127]」と述べたことを取り上げ、その発言は、社会事業は莫大な経費を要し、結果としてミッションボードや宣教師たちからの支援を仰がざるを得ない、基盤脆弱な明治期の日本基督教会の現実を憂いての発言であり、当面は伝道と教会形成に専念すべきと主張し、また植村自身は社会的な関心を有し、社会事業の必要性とその意味も理解していたが[128]、その後の影響力に注目し、この伝道戦略が、その後の日本の教会の基本方針になってしまったことの問題性を示した[129]。明治期の日本基督教会は宣教師、外国ミッションに財政的な依存関係であり[130]、当時の教会にとって海外宣教団からの経済的な自給独立は重要な課題であり、それ自体はその時代に適切な目標で

127 『福音新報』（主宰者植村）34 号、1891 年。『植村正久著作集 6 巻』（新教出版社、1967 年、15-16 頁）にも「濫りに教会の事業を企つるなかれ」と題して収録あり。

128 植村正久（1858-1925）（『日本キリスト教歴史人物事典』教文館、2020 年、113 頁）

129 戒能信生「日本の教会の社会への関わりの歴史―明治期プロテスタント史に遡って考える」（『富阪キリスト教センター紀要』6 号、2016 年、255 頁）

130 森岡清美「日本基督一致教会」（『明治キリスト教会形成の社会史』東京大学出版会、2005 年、333-372 頁）

あったと理解できる。日本伝道を外国人宣教師に依存せず日本人自身が担うべきだという主張であった。日本基督教会が 1896 年第九回大会で制定された伝道局条例も外国伝道会社との関係を断った伝道をめざすものであった。しかし、社会事業の文脈おいては、本来のキリスト教の本質的役割からズレた組織保身的言説と響くものである。外島家族教会は、一宣教師の支援によって生まれたが、召天にあたりその後、当時の教会と海外宣教団体との関係性、社会の時勢に呑み込まれ、支援が細々となっていった理由の一端がそこにあると推測される。

2019 年 10 月 12 日、台風 19 号が関東地方を通過した際、東京都台東区が設置した自主避難所を訪れた路上生活者（野宿者、ホームレス）が、受け入れを断られるという事件が発生した。避難所に入れず排除された事を行政が後日釈明した事例があった[131]。それらは、水害などの際の人命保護についての現場での対応を垣間見る事件であり、市民社会において他者の命を守る公共福祉の観点でどのように考え対応するか、本質的な課題を示唆するものではないだろうか。単純には比較できないが、コロナウィルス拡大の中、派生した差別を考えるに際して、前述した外島保養院入所キリスト者とそれを支えた人々の「経験」は、普遍的な真理を有しており、そこから教訓を受け取ることが出来るのではないか、外島保養院と家族教会の資料はそれらを語りかけていると思わされる。

療養所入所キリスト者たちの諸活動は、様々な研究に於いて、「慰安教化」[132]など隔離政策に利用されていったとの評価があるが、それだけでその活動を一括りにすることは、見失うものが大きいと思わされる。当時は、

131　毎日新聞記事「台風 19 号避難所には「行かない」路上生活者「差別受ける」https://mainichi.jp/articles/20200110/dde/001/040/040000c　2022 年 12 月 5 日最終閲覧

132　「ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任―宗教界」（『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』同検証会議編集、2005 年、420-427 頁）https://www.jlf.or.jp/assets/work/pdf/houkoku/saisyu/13.pdf　2022 年 12 月 5 日最終閲覧

個人としてそのように生きることが、療養所で抗うことであり　病を負いながらも、他者を大切に仲間と共に歩むことは、自分自身に与えられた「生」を生きた証しであると考える。[133] また、宗教者一人ひとりの、真の「生きること」の応答であり、その行動の源泉は別次元であることは重要な事である。

先にも述べたが、自治会に関わらない選択、内に閉じた、自分の内面の慰めだけにとどまる個人・内面的信仰生活に留まることもできたが、与えられた自らの生と歩みを信じ歩んだといえる。療養所内生活の自己だけを守るのではなく、院全体の生活向上、秩序改善のために、「相愛互助」として自治に関わったのではないだろうか。外島家族教会信徒は、福田、A・D・ヘールよりキリスト教的世界観を学び、「キリスト者の自由」的精神に倣う者として、キリスト教的社会的責任から押し出され、療養所内の諸問題にあたったと推測する。聖書塾を卒業した家族教会副会長藤本藤松は自治会規則草案を書いた際その末尾に「人誰か苦しまずんば大衆の幸福なし」と残したという。[134] 現代の信仰者にも通じる本質的な信仰の姿が、凝縮され見出される。

ハンセン病問題は、ハンセン病問題基本法が成立したが、なお社会に残る偏見・差別は解消に至っていない。日本におけるハンセン病問題の研究は、「救癩の歴史」そして「隔離政策」の批判的検証、加害者 VS 被害者の二項対立の枠組みでの事実究明の調査研究が行われ、その後、入所者自身の生活史に立脚した総体を考察する研究へと変化してきた。本研究ではハンセン病療養所の相互愛助の精神の背景にあった、入所者キリスト者とそれを取り巻く人々の側から光を当てたものである。改めて、その構図を超え、新たな気づきを得て、その資料と記憶の保存・継承の具体的な方策に活かしていけば幸いである。

ハンセン病問題は時が過ぎれば社会において周縁化され、ハンセン病問

133　若松英輔『「生きがい」と出会うために』NHK 出版、2021 年、51-92 頁
134　森「外島家族教会をめぐる人々」（『足跡は消えても』128 頁）

題の本質や複雑性も意味が埋没する問題性を孕んでいる。遺産的記憶として、今を生きる人々へその都度、語り掛ける本質を有していると思われる。そのためには、忘却に対して抗うことが必要で、人々を継承に駆り立てる資料の意味づけが重要である事が示される。加害・被害の二元論的問題解決をするのではなく、社会・文化的背景のなかで、隔離を生み差別を起こす構造に潜んでいるものを検証していくことが必要であると思わされる。資料と現代を結ぶためのアーカイブズは窓的モチーフを有する。資料の光を現代に照らすため、アーカイブズは現地になんらの関わりをもち、啓発イベントや展示会などにおいて、資料が放つ光をどう有効に示せるかの記憶の整備が必要である。言葉を変えると窓を通して、閉じないように見張る、ハンセン病資料に有効な光を照らし、見出し示していく必要がある。

（本稿は、JSPS KAKENHI 21H03873 による研究の一部である）

## 謝辞

この調査のために、協力いただいた多くの方々にこの場を借りて深く御礼申し上げます。特に日本キリスト教会神学校図書館、大阪女学院、松沢記念資料館の学芸員、専門職の方々にはひとかたならぬ協力をいただきました。その働きに敬意を表し心より感謝をお伝えします。またハンセン病資料館、重監房資料館、療養所回復者の方々、元清教学園聖書科の秋山英明師（大阪南吹田教会牧師）には大変お世話になり感謝申し上げます。

「幽闇（くらき）をあゆめる民は大いなる光をみ、
死蔭（しかげ）の地にすめる者のうへに光てらせり」
以賽亞（イザヤ）書九章二節（文語訳 舊約聖書）

## 外島家族教会の関連年表

| 年 | 外島家族教会関係 | 外島保養院関係 | 基督教界、社会の出来事 |
|---|---|---|---|
| 1904（明治 37） | | | 日露戦争（―1905） |
| 1909 | | 4 月、第三区連合府県立「外島保養院」開設（収容定員 300 床）今田虎次郎院長任命<br>慰籍会、栗おこし会発足 | 癩予防ニ関スル件施行、連合府県立療養所設立(5 区域) |
| 1911 | | | 大逆事件の 11 名死刑 |
| 1912（大正元） | 創立発足式、（宗教団体として公認される<br>A・D・ヘールより 12 名洗礼受ける。最初の聖餐式。大阪女学院生徒も同伴、一般入院者にもプレゼント（『おとうさん』34 頁） | | 7 月 29 日、明治天皇崩御<br>7 月 30 日、大正に改元 |
| 1913 | 日曜学校はじまる。2 名の少年と 3 名の少女、教師は福田師（月 1、藤本、岩本（1 週間交替） | | |
| 1914 | キリスト教に対する迫害、信者 70 名から 30 名ほどになる半数以上が脱会、迫害は教会創立当時より昭和元年まで続いた | | ドイツに宣戦布告、第一次世界大戦に参戦 |
| 1915 | | 増築病舎 4 棟完成（収容定員 400 床） | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1918 | | 自治組織が発足(1918年の統計年表に「自治会制度」との記載開始 | スペイン風邪大流行 –1920<br>夏の米騒動<br>大阪府、救済課新設 |
| 1921 | クリスマス会、鶏十羽献品 | その後、起因で自治会で鶏舎を経営することとなる<br>青年団が設立、雑誌「外島公論」発刊 | 基督教会と組合教会の合同問題 |
| 1922 | クリスマス会で活動写真上映 | | 全国水平社結成、ソビエト連邦誕生 |
| 1923 | 5月17日ヘール最後の訪問<br>召天者総追悼記念会開催<br>6月5日　ヘール召天<br>6月12日ヘール記念会を開く<br>福田荒太郎師、牧師職を失うが、その後も外島保養院へ伝道を続ける、当時信徒は70名 | その頃から軟式野球がはじまる<br>向上会が設置される | 関東大震災 |
| 1924 | | 大阪市に編入、住所、西淀川区外島町となる | 内務省衛生調査会、根本的癩予防策要項を決議、外島保養院定員を千名に決定 |
| 1925 | 最初の基督教葬儀が行われた（それまではすべて真言宗式） | 大阪市西淀川区外島町と変更、大阪市に編入され上水道、送電線、敷設 | 普通選挙法制定<br>治安維持法制定<br>日本MTL発足 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1926（大正 15・昭和元） | 『ヘール先生の片影』発行<br>桑田牧師の斡旋で石黒寅亀神学生が通いその後 4 年半奉仕 | 自治を支援。拡張・移転計画、移転予定地住民反対運動のため頓挫 | 大正天皇崩御、昭和に改元 |
| 1927 | | 村田正太院長就任<br>青年団が再建される、全入所者によって互助会が組織される | |
| 1928 | | 見張所撤去、自治会規約改正施行、名称を互助会から自治会と改める<br>四貫島セツルメントによる売店が始まる | 「昭和大礼」の際、放浪患者隔離強化のため外島保養院を拡張。<br>日本癩学会創設 |
| 1929 | 岩本定吉伝道師召天<br>桂文吉、教会会長に就く | 四貫島セツルメントによる売店の在庫すべて寄贈を受ける | 関西 MTL 結成<br>大阪帝国大学皮膚科に大阪皮膚科研究所設置 |
| 1931 | | 機関紙「外島タイムス」創刊。マルクス主義団体「五月会」結成される。入所者間の対立深化<br>大島療養所で外島保養院自治会を参考に自治会が設立 | |
| 1932 | | 4 月、外島学園開設<br>大島療養所に外島保養院入所者、交歓のため訪問 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1933 | | 外島事件おこる20名追放処分<br>村田院長辞任、三代目原田久作院長就任<br>非公式に日本プロレタリア癩者解放同盟が結成される | |
| 1934 | 牧師:石黒寅亀（昭和10年基督教年鑑による | 室戸台風のため外島保養院が崩壊、196名犠牲、6療養所に入所者分散委託療養 | 9月21日室戸台風、関西を来襲 |
| 1936 | | 機関誌『楓』創刊<br>長島事件起きる | |
| 1938 | 光明園家族教会と改称、「家族」を引き継ぐ、会員50名<br>ウォルズ宣教師によるクリスマス礼拝 | 岡山県邑久郡に移転、名称を光明園と改名して再建開設。委託者帰園 | |
| 1939 | 教会堂献堂式（アメリカMTLの献金による） | | |
| 1947 | | | 日本でプロミン治療が開始される<br>日本国憲法施行 |
| 1949 | 日本基督教団加入許可下りる | | |
| 1951 | 福田荒太郎来訪、三十余年ぶりの訪問 | | 日本癩学会、日本医学会第35分科会へ加入 |
| 1955 | 福田荒太郎召天(熱海教会)<br>播磨醇神学生（関西学院大）夏期伝道実施 | | 愛生園内に定時制高校邑久高校新良田分校を設置 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1959 | 教会堂献堂式、藤原好善社理事長一行参列 | | 邑久高校新良田教室第一回卒業式 |
| 1965 | 阿部礼治名誉会長召天 82 歳 | | |
| 1972 | 津島久雄伝道師就任 | | |
| 1975 | 福田の息女、大泉かおるが、家族教会礼拝に参加し、福田の思い出などを語り合った | | |

＊参照、「風と海のなか」年表；光明園家族教会年表；『大阪府ハンセン病実態調査報告書』

## 外島家族教会関連主要図書一覧

外島保養院また家族教会に関する図書としては以下のものがある（出版年順）

- 「外島壊滅―無防備の療養所を襲った惨劇」（『ふれあい福祉便り』23号、ふれあい福祉協会、2022 年）
- 松岡弘之『ハンセン病療養所と自治の歴史』みすず書房、2020 年
- 大山勝男『無癩運動―大阪にあったハンセン病療養所 外島保養院』Amazing Adventure（アメージング出版）、2019 年
- 外島保養院の歴史をのこす会『大阪にあったハンセン病療養所 ― 外島保養院』大阪市保健所感染症対策課発行、2017 年
- 邑久光明園入園者自治会『隔離から解放へ ― 邑久光明園創立百周年記念誌邑久光明園入所者百年の歩み』山陽新聞社、2009 年
- 『A.D. ヘール先生と外島家族教会』大阪女学院、2008 年
- 『大阪府ハンセン病実態調査報告書』（付資料編）同報告書作成委員会、

2004 年
・藤野豊解説「復刻版外島保養院年報」（『近現代日本ハンセン病問題資料集成』補巻 1・2、不二出版、2004 年）
・中村勲『いのち萌えて ― 外島保養院で夢を追った人々』中村勲、2002 年
・中山昇『A.D. ヘールに学ぶ ― わらじばきの宣教師』カナン文庫、2001 年
・『国立療養所邑久光明園創立 90 周年記念誌』国立療養所邑久光明園、1999 年
・森幹郎『足跡は消えても ― ハンセン病史上のキリスト者たち』ヨルダン社、1996 年（初版 1963 年）
・邑久光明園入園者自治会『風と海のなか ― 邑久光明園入園者八十年の歩み邑久光明園自治会 80 周年記念誌』日本文教出版、1989 年
・国立療養所邑久光明園 [ 編 ]『創立 80 周年記念誌』国立療養所邑久光明園、1989 年
・藤本とし『地面の底が抜けたんです ― ある女性の知恵の七十三年史』思想の科学社、1974 年
・『国立療養所邑久光明園創立 60 周年記念史』国立療養所邑久光明園、1969 年
・桜井方策「旧外島保養院誌」（『楓』邑久光明園、1968-73 年）
・播磨醇、植田一男編『おとうさん ― 阿部礼治長老追悼記念文集』光明園家族教会、1967 年
・阿部礼治「外島保養院小史」1－8（『楓』邑久光明園、1952-53 年）
・飯崎吐詩朗『やすらひ―歌集』外島保養院患者慰藉会、1938 年
・第三區府縣立外島保養院『風水害記念誌』第三區府縣立外島保養院、1935 年
・岩本清濤（定吉）『故ヘール先生の片影』福田荒太郎、1926 年